

岩手県埋文センター文化財調査報告書第17集

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書

二戸郡安代町 **扇畑 I 遺跡**

昭和54年度

(財)岩手県埋蔵文化財センター
日 本 道 路 公 団

序

岩手県内には数多くの遺跡が存在することは広く知られている所であり、昭和55年3月の県教育委員会文化課調査によりますと、県下に所在する埋蔵文化財包蔵地は4,719ヶ所の多きとなっております。この数は今後分布調査の範囲の拡張によって更に増加するものと考えられます。この埋蔵文化財包蔵地は、我々の祖先が残してくれた貴重な文化遺産であります。この貴重な文化遺産を後世に守り伝える責務が我々に課せられているものと考えている所であり、ます。

近年岩手県においても東北縦貫自動車道建設をはじめ、御所ダム建設等大型公共事業が実施され、その対象地内に多くの埋蔵文化財包蔵地が包括されております。これら対象地内の包蔵地について、事業実施以前に事業者と県文化課との間でその取扱い方を協議し、その保護につとめています。しかし事業とのかかわりにおいて発掘調査を行ない記録保存をする所もでて参ります。

当センターにおいては、埋蔵文化財保護の立場に立って、これら事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地の発掘調査に取り組んで参りました。発掘調査によってこれまで数々の貴重な資料を得ております。例えば、集落址としては、都南村湯沢遺跡、松尾村長者屋敷遺跡、盛岡市つなぎⅢ遺跡、水沢市膳性遺跡等、遺構・遺物としては盛岡市萩内遺跡の舳、足跡、弓、大型土偶など数多くございます。又これらの資料の整理、報告書の公刊についても職員一同一丸となって鋭意努力しておる所でございます。

今般センター一丸の努力によって、ここに本報告書を刊行いたすことになりました。内容については不十分の点が多々あるとは思いますが、本報告が、いささかでも関係各位の参考に使われ、斯学向上の一助となれば幸甚と存じます。

最後に県教委、委託者をはじめ、関係各位に多大なご協力、ご援助を頂きましたことに厚く感謝申し上げます、今後のご指導、ご協力を合せてお願い申し上げます。

昭和56年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

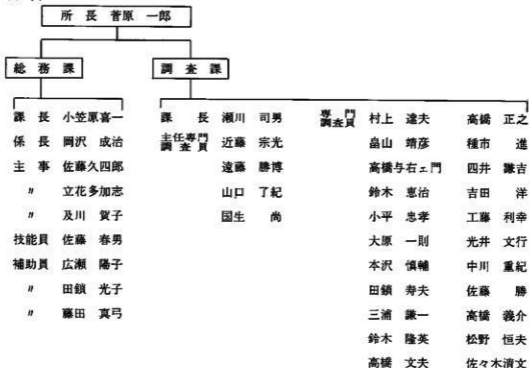
理事長 新 里 盈

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役員

- 理事長 新里 盈 (県教育長)
 副理事長 古館尚一郎 (県教育次長)
 常務理事 菅原 一郎 (県埋文センター所長)
 理事 土門 隆三 (県農政部長)
 佐々木益人 (県林業水産部長)
 菊池 岩人 (県土木部次長)
 森 嘉兵衛 (岩手大学名誉教授)
 板橋 源 (岩手大学名誉教授・県立博物館館長)
 草間 俊一 (岩手大学人文社会科学部長)
 小形 信夫 (前常務理事)
 監事 熊谷 正男 (県文化課長)
 及川 久男 (県財務課長)

職員



緒 言

1. 本報告書は岩手県二戸郡安代町扇畑に所在する扇畑Ⅰ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本調査は東北縦貫自動車道建設に伴う事前緊急調査である。調査について日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会文化課が協議し、文化課の要請と指導により、財団法人岩手県埋蔵文化財センターが調査を行なった。
3. 発掘調査は、昭和54年5月10日から5月22日まで掘削を行ない、9月1日から11月2日まで精査を行なった。整理まとめの作業は11月5日から昭和55年12月24日まで行なった。
4. 発掘調査面積は2,800㎡である。
5. 調査には近藤宗光、佐々木清文があたった。
6. 発掘調査にあたって次の方々の御教示を賜わった。
町田 洋（東京都立大学助教授）、高橋信雄（岩手県立博物館）、相原康二（岩手県教委文化課）
7. 炭化物材質鑑定は岩手県木炭協会、早坂松次郎氏に依頼した。
石質鑑定は本センター専門調査員、種市進が行なった。
8. 発掘調査において、安代町役場、日本道路公団西根工事事務所の御協力を賜わった。
9. 本報告書の執筆分担は次の通りである。

I. 調査に至る経過	瀬川司男
II. 調査方法と整理方法	近藤宗光
III. 遺跡の立地と環境	種市 進 近藤宗光 佐々木清文
IV. 検出された遺構と遺物	
1. 竪穴住居址	A、B区 近藤宗光
C、D、E区	佐々木清文
2. ビット類	佐々木清文
V. 考察とまとめ	
1. 遺構	佐々木清文
2. 遺物	近藤宗光
3. おわりに	近藤宗光
10. 検出された遺構は次の通りである。
竪穴住居址 11棟 ビット 17基 焼土遺構 3基 陥し穴状遺構 2基
11. 図版の作成にあたって次の方々の協力を得た。

佐藤満恵	藤島ヒロ子	南館恭子	鈴木スズ子	浅沼啓子	岩館のふ子
川村京子	武蔵アサヨ	浅沼光子	浅沼幸子	勝政タカ子	越場ミチエ
瀬川幸子	吉田律子	滝村キヨ	北条恵美子	浅沼朝子	阿部蓉子
大木エサ	吉田サン	佐藤リエ	佐藤和也	松村 公	高橋 弘

12. 発掘調査作業に御協力いただいたのは次の方々である。

関 徳太郎	関 直弥	関 小二郎	関 源四郎	関 由松	関 力雄
柚 馨太郎	工藤万次郎	北館忠一	阿部龍五郎	阿部万次郎	北館由太郎
村上万次郎	村上善次郎	斎藤政吉	立花ナチ	関 オヨシ	関 ミサ
畠山キミ	関 サワ	関 ミツ	田村宮子	柚 マツ	斎藤スエ
斎藤タキ	工藤キク	佐々木律子	藤原トメ	斎藤ミツ	関 キク
勝又クラ	畠山ナミ	関 信子	斎藤ハギ	関カズエ	立花チヨ
畠山ミヨ	斎藤クニ子	阿部チヨ	藤村ミサ	立花テイ子	斎藤マサノ
村上ナカ	北館キヌ	北館テル子			

目 次

序	i
緒 言	iii
I. 調査に至る経過	4
II. 調査方法と整理方法	6
III. 遺跡の立地と環境	8
IV. 検出された遺構と遺物	12
1. 竪穴住居址		
A I - 1 住居址12	
B II - 1 住居址19	
C I - 1 住居址22	
C I - 2 住居址28	
C I - 3 住居址31	
C II - I 住居址35	
D I - 1 住居址36	
D III - 1 住居址42	
E II - 1 住居址45	
E II - 2 住居址46	
E II - 3 住居址48	
2. ビット	52
A II 区52	
C I 区52	
C II 区55	
D I 区57	
3. 焼土遺構	58
4. 陥し穴状遺構	58
V. 考察とまとめ	61
1. 遺構	61
(1) 竪穴住居址	62
各住居址の構築された時期	62
C I - 1 住居址の上屋構造の推察	66
(2) ビット	69
2. 出土遺物	71
3. おわりに	74

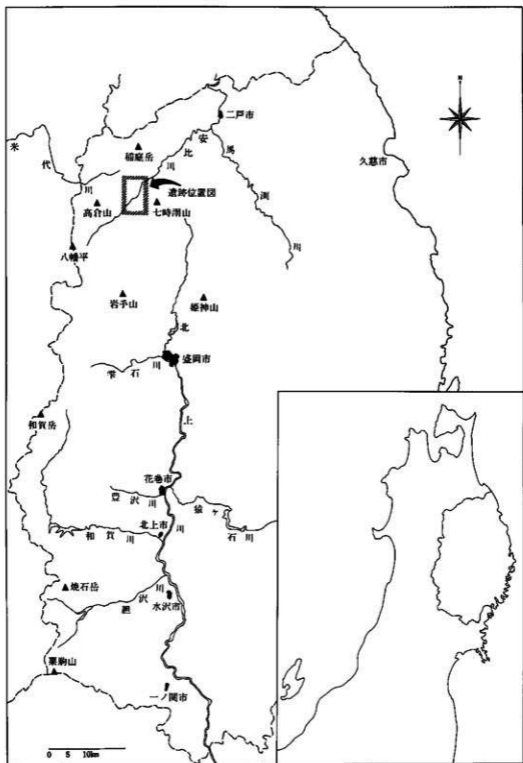
図版目次

図版 1	岩手県全体図……………	1	図版28	出土遺物 (A I - 1 住居址) ……	79
図版 2	遺跡位置図……………	2	図版29	出土遺物 (A I - 1 住居址) ……	80
図版 3	遺構配置図……………	13~14	図版30	出土遺物 (A I - 1 住居址) ……	81
図版 4	A I - 1 住居址実測図……………	15	図版31	出土遺物 (A I - 1 住居址・B II - 1 住居址) ……	82
図版 5	A I - 1 住居址実測図……………	16	図版32	出土遺物 (B II - 1 住居址) ……	83
図版 6	B II - 1 住居址実測図……………	20	図版33	出土遺物 (B II - 1 住居址) ……	84
図版 7	B II - 1 住居址実測図……………	21	図版34	出土遺物 (B II - 1 住居址) ……	85
図版 8	C I - 1 住居址実測図……………	23	図版35	出土遺物 (C I - 1 住居址) ……	86
図版 9	C I - 1 住居址実測図……………	24	図版36	出土遺物 (C I - 1 住居址) ……	87
図版10	C I - 1 住居址実測図……………	25	図版37	出土遺物 (C I - 1 住居址) ……	88
図版11	C I - 2 住居址実測図……………	29	図版38	出土遺物 (C I - 2 住居址) ……	89
図版12	C I - 2 住居址実測図……………	30	図版39	出土遺物 (C I - 2 住居址) ……	90
図版13	C I - 3 住居址実測図……………	33	図版40	出土遺物 (C I - 2 住居址) ……	91
図版14	C I - 3 住居址実測図……………	34	図版41	出土遺物 (C I - 3 住居址) ……	92
図版15	C II - 1 住居址実測図……………	37	図版42	出土遺物 (C I - 3 住居址) ……	93
図版16	D I - 1 住居址実測図……………	38	図版43	出土遺物 (C I - 3 住居址) ……	94
図版17	D I - 1 住居址実測図……………	39	図版44	出土遺物 (C I - 3 住居址・C II - 1 住居址) ……	95
図版18	D I - 1 住居址実測図……………	40	図版45	出土遺物 (D I - 1 住居址) ……	96
図版19	D III - 1 住居址実測図……………	43	図版46	出土遺物 (D I - 1 住居址) ……	97
図版20	D III - 1 住居址実測図……………	44	図版47	出土遺物 (D III - 1 住居址) ……	98
図版21	E II - 1 住居址・E II - 2 住 居址・E II - 3 住居址実測図……………	47	図版48	出土遺物 (D III - 1 住居址) ……	99
図版22	E II - 3 住居址実測図……………	49	図版49	出土遺物 (D III - 1 住居址・E II - 1 住居址) ……	100
図版23	E II - 3 住居址実測図……………	50	図版50	出土遺物 (E II - 1 住居址・E II - 2 住居址・E II - 3 住居址) ……	101
図版24	ピット実測図……………	53	図版51	出土遺物 (E II - 3 住居址・C I - 53ピット) ……	102
図版25	ピット実測図……………	56			
図版26	焼土遺構・陥し穴状遺構実測 図……………	59			
図版27	出土遺物 (A I - 1 住居址) ……	78			

写真図版目次

1. 遺跡全景写真……………	105	C I -56ビット (全景・埋土断面) ……	122
2. A I -1 住居址 (全景・カマド) ……	106	19. C I -58ビット, C I -59ビット,	
3. A I -1 住居址 (カマド) ……	107	C II -51ビット (全景・埋土断面) ……	123
4. B II -1 住居址 (全景・埋土断面・ 遺構検出状況) ……	108	20. C II -52ビット, C II -54ビット, D I -51ビット, C I -101焼土遺 構 (全景・断面) ……	124
5. B II -1 住居址 (カマド) ……	109	21. C I -102焼土遺構, C I -103焼土 土遺構, C II -151陥し穴状遺構, D II -151陥し穴状遺構 (全景・断 面) ……	125
6. C I -I 住居址 (全景・埋土断面・ 炭化材出土状態) ……	110	遺物写真	
7. C I -1 住居址 (カマド・ビット) ……	111	22. A I -1 住居址……………	126
8. C I -1 住居址 (炭化材・遺物出 土状態) ……	112	23. A I -1 住居址, B II -1 住居址……………	127
9. C I -2 住居址 (全景・カマド) ……	113	24. B II -1 住居址……………	128
10. C I -3 住居址 (全景・埋土断面) ……	114	25. C I -1 住居址……………	129
11. C I -3 住居址 (遺物出土状況・ カマド・ビット) ……	115	26. C I -2 住居址……………	130
12. C II -1 住居址 (全景・遺物出土 状況・風倒木痕断面) ……	116	27. C I -3 住居址……………	131
13. D I -1 住居址 (全景・埋土断面・ 炭化材出土状況) ……	117	28. C I -3 住居址……………	132
14. D III -1 住居址 (全景・埋土断面・ カマド) ……	118	29. C I -3 住居址, C II -1 住居址, D I -1 住居址……………	133
15. E II -1 住居址 (遺物出土状況・ ビット) E II -2 住居址 (全景・カマド) ……	119	30. D III -1 住居址……………	134
16. E II -3 住居址 (全景・炭化材出 土状態・カマド) ……	120	31. D III -1 住居址, E II -1 住居址, E II -2 住居址……………	135
17. A II -51ビット, C I -51ビット, C I 52ビット (全景・埋土断面) ……	121	32. E II -3 住居址, A I -1 住居址, C I -1 住居址, C I -3 住居址……………	136
18. C I -53ビット, C I -55ビット,		33. C I -1 住居址, D I -1 住居址, D III -1 住居址……………	137
		34. A I -1 住居址, C I -1 住居址,	

C I - 2 住居址, D I - 1 住居址.....	138
35. A I - 1 住居址, C I - 1 住居址, C I - 3 住居址.....	139
36. 繩文土器片 (B II 区 · E II 区)	140



図版 1 岩手県全体図

遺跡名一覧表

- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. 赤坂田 I 遺跡 | 28. 曲田経塚 I 遺跡 |
| 2. 赤坂田 II 遺跡 | 29. 曲田経塚 II 遺跡 |
| 3. 寄木 I 遺跡 | 30. 上の山館跡 |
| 4. 扇畑 I 遺跡 | 31. ヤカマシダ遺跡 |
| 5. 扇畑 II 遺跡 | 32. 横間台遺跡 |
| 6. 小屋畑遺跡 | 33. 横間 I 遺跡 |
| 7. 荒屋 I 遺跡 | 34. 横間 II 遺跡 |
| 8. 荒屋 II 遺跡 | 35. 曲田 I 遺跡 |
| 9. 瀬戸谷地蔵跡 | 36. 曲田 II 遺跡 |
| 10. 荒屋館跡 | 37. 曲田 III 遺跡 |
| 11. 荒屋一里塚 | 38. 曲田 IV 遺跡 |
| 12. 保戸沢遺跡 | 39. 曲田 V 遺跡 |
| 13. 保戸坂遺跡 | 40. 曲田 VI 遺跡 |
| 14. 有矢野遺跡 | 41. 曲田 VII 遺跡 |
| 15. 有矢野館跡 | 42. 曲田一里塚 |
| 16. 五日市里城跡 | 43. 曲田 IX 遺跡 |
| 17. 上の山 I 遺跡 | 44. 曲田 X 遺跡 |
| 18. 上の山 II 遺跡 | 45. 曲田 XII 遺跡 |
| 19. 上の山 III 遺跡 | 46. 越戸 I 遺跡 |
| 20. 上の山 IV 遺跡 | 47. 越戸 II 遺跡 |
| 21. 上の山 V 遺跡 | 48. 越戸 III 遺跡 |
| 22. 上の山 VI 遺跡 | 49. 戸沢遺跡 |
| 23. 上の山 VII 遺跡 | 50. 戸沢 I 遺跡 |
| 24. 上の山 VIII 遺跡 | 51. 戸沢 II 遺跡 |
| 25. 上の山 IX 遺跡 | 52. 戸沢 III 遺跡 |
| 26. 上の山 X 遺跡 | 53. 目名市遺跡 |
| 27. 上の山 XI 遺跡 | 54. 目名市館跡 |
| | 55. 日影 I 遺跡 |



圖版 2 遺跡位置圖

I. 調査に至る経過

東北縦貫自動車道建設にかかわる調査は、昭和47年4月より県教育委員会事務局社会教育課によって開始された。調査区間は一関—盛岡間約90kmで、47年度においては用地買収が先行した花巻工事事務所管内の金ヶ崎町、北上市、花巻市に所在する遺跡調査を行なった。しかし調査工程と工事工程との間に大巾な差のある事、東北新幹線関連遺跡の調査も47年10月より開始されたことも重なり、調査体制の整備が強く要望された。

この要望に応え、文化行政の強化のためあって昭和48年4月に県教育委員会事務局に新たに文化課が設置された。

一方東北縦貫自動車道建設、東北新幹線建設工事に刺激されたかのように、県内各地で大型開発が行なわれ、これに対応することが必要になってきた。

しかし調査は工事工程とのかかわりから越冬まで行なわれ、文化庁主任調査官の水野正好氏を驚かせるという一幕もあった。この調査の強行は当然・整理・報告書への送寄せとなり一冊の報告書も刊行できない状態となっていた。

この事態の解決と恒久的な調査体制への指向を目指し、昭和52年に財団法人岩手県埋蔵文化財センターが発足した。これによって県が行なうべき埋蔵文化財にかかわる調査は(財)岩手県埋蔵文化財センターが実施することになり、昭和53年度からは特別な調査を除いては全て実施している。

東北縦貫自動車道建設関連の調査は、県文化課と(財)岩手県埋蔵文化センターの協議によって、年度としては昭和52年度分、区間としては第5次区間の西根インターまでを県文化課が実施すること、西根インター以北の第5次区間及びそれ以降実施される8次区間は埋蔵文化センターが実施することになった。

西根インター以北の遺跡に係わる経過をたどると、昭和48年度に2km巾の分布調査を関連公共調査の一貫として県文化課及び学識経験者を中心に行なわれ、49年500m巾の分布調査が行なわれ、50年度に中心柱が打たれ、路線発表後にルートに沿って再度分布調査が県文化課によって行なわれた。この時点において安代町越戸館が、ルート内に所在する事が判明し、ルート変更を強く要望した。このルート変更については日本道路公団が応じ破壊を免がれた。

ルート決定が終わり、県文化課・日本道路公団との間の協議が進み、昭和53年に(財)県埋蔵文化センターとの間で調査に関する委託契約が結ばれた。

昭和53年度調査は西根町、松尾村を中心に進められた。安代町関係の遺跡は荒屋Ⅱ遺跡のみが対象となった。しかしこの遺跡の調査も粗掘を中心に行なったが一部精査も行ない昭和54年

度継続調査とした。この調査によって県下では未発見タイプの陥し穴状遺構が検出された。

昭和54年度は東北縦貫道関連遺跡調査は松尾村長者屋敷遺跡を除き安代町に集中した。工事工程との関係についての協議が昭和53年暮から54年3月まで行なわれた。公団側は安代インターまでの調査完了を要望し、文化課、埋文センターは安代インターのみの調査を主張した。その後の協議により、調査完了遺跡4、粗掘遺構検出のみ5（但し粗掘の途中において再協議を行なう。）とすることにした。即ち、

調査完了遺跡 荒屋Ⅰ・Ⅱ、有矢野、上の山Ⅹの各遺跡

粗掘・検出遺跡 赤坂田Ⅰ・Ⅱ、安代寄木、扇畑Ⅰ・Ⅱの各遺跡

である。

調査開始後、天候に恵まれ順調に推移した。昭和54年7月初旬に道路公団・県文化課・県埋文センターの三者協議をもち、粗掘グループのうち扇畑Ⅰ遺跡を9～10月に精査し調査を完了すること、安代寄木遺跡は遺構が検出されないことから調査対象外とすること。調査完了グループの進行が予定より順調であることから、越戸トンネルの越戸側に存在する越戸Ⅱ遺跡を追加することとした。

越戸Ⅱ遺跡を最後に全ての調査を11月に完了した。

II. 調査方法と整理方法

1. 調査方法

(1) 調査区の設定

日本道路公団仙台建設局が測量を終了しているので、同所より1000分の1及び5000分の1の地形図の供号を受けたものを参考とし、その中心軌STA244+40とSTA245+00を直線で結び中軸線とした。更にそれに直交する基準線はSTA244+40を基点として設定し、1区画30m×30mのブロックを設けた。各区画は東から西に向ってA-E、北から南へ向かってI-IIIとし、A I区、B II区というような呼称をした。中軸線は磁北より62.5度東偏している。

(2) 遺構名

検出された遺構の呼称は、住居址は1～50番台、ピットは51～100番台、焼土遺構は100～150番台、陥し穴状遺構は151～200番台の番号を付し、頭に検出された区名をつけた。

(3) 粗掘

任意の数箇所を3m×3mの範囲で試掘し、遺構の検出面を把握した後、バックホーによる表土除去を行なった。

(4) 精査

住居址は4分法、ピットは2分法を原則とし、遺構の状況に応じて行なった。埋土が単層の場合や住居址内の柱穴やピットなどの埋土についてはフィールド・カードに記載したのみで、実測図の作成を省略したものもある。

(5) 実測

住居址の平面図、断面図、及びピット類の平面図、断面図は20分の1の縮尺、カマドの平面図、断面図は10分の1の縮尺で図面を作成した。平面図の測量は遣り方測量を原則した。

2. 整理の方法

ここでは調査結果をまとめて報告書を作成するにあたって行なった作業の要点を示し、あわせて図版等の凡例とする。

(1) 本文の記述

本文は2名の調査員で随時情報交換、協議しながら記述した。「地形・地質」の記述は安代町全体の地形・地質についてまとめた当埋蔵文化財センター職員、種市進による。

(2) 遺構図

- a 遺構配置図は、野外発掘調査時に作成した平面図を基に $\frac{1}{500}$ の縮尺図を作成し、それ

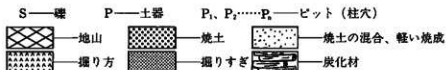
にスケールを付して縮尺不定で載せた。

- b. 各遺構図は、野外発掘調査時に作成した図をトレースし、それにスケールを付して、
 竪穴住居址は $\frac{1}{60}$ 、(但しCII-1住居址は $\frac{1}{30}$)、カマドは $\frac{1}{60}$ 、ビット類は $\frac{1}{60}$ で載せた。

住居址の埋土が単純なものは1方向のみの断面図を載せた。

磁北は図中のN-S軸線より62.5°西に偏る。

図中の記号、スクリーントーンは次の通りである。



(3) 出土遺物

a. 土器

- 縄文式土器——表土から少量出土した代表的なものを写真で載せた。
- 土師器——この遺跡の主要な遺物である。原則として $\frac{1}{4}$ 以上残存(口縁部のみのものは、その $\frac{1}{4}$ 以上、底部のみのもの $\frac{1}{4}$ 以上)するものを図化した。

調整技法は明瞭な箇所のみ中軸線の両側3~4cmだけを図化した。黒色処理している場合スクリーントーンで示した(説明図参照)。破線は沈線を表わしている。

残存の割合は口縁の線の引き方で区別した。 $\frac{1}{4}$ 以上残存するものは全部引き、 $\frac{1}{4}$ 以下残存のものは線も $\frac{1}{4}$ 以下とした。

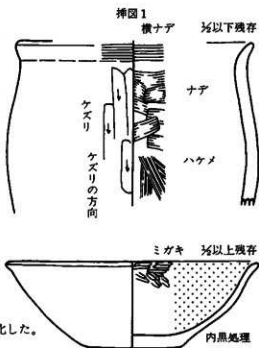
図は住居址ごとにまとめて載せ、左上には口径、器高、底径の順に計測値をかき、右上には出土点を示した。

- 須恵器——土師器と区別するため断面を黒く塗り潰した。

b. 石器 砥石のみで出土である。

- c. 鉄製品 表面の錆を除去したのみで大半の錆は附着したまま図化した。錆の部分の表現は簡略化し本体中心に図化した。

d. 木製品 炭化櫛1点の出土である。



Ⅲ. 遺跡の立地と環境

1. 安代町内各遺跡の立地と水系

安代町の水系は、馬淵川の支流である安比川と米代川の2系統によって構成されている。その流域の占有割合はそれぞれ約5割となっている。以下その本流流域について概観する。

安比川は、八幡平黒谷地帯の北方にその源を発し、安比岳(1,493m)と茶臼岳北方の恵比須森(1,496m)との間に浸蝕谷を形成しつつ北流する。安比高原を開析した急峻な谷間を進み、安代町細野及び豊畑で大規模な扇状地を形成する。さらに北流し東方に深沢山(690.4m)・御月山(954.4m)・国樽山(580.0m)・七時閉山(1,060m)を、西方に黒森山(972m)・大尺山(741.2m)を遡望する。赤坂田付近で東岸に安比川からの比高約38m(以下に単に比高と呼ぶ)、長さ約700mの段丘を後背山地から張り出す形でみる。さらに北方に続く寄木・扇畑では合流する深沢・見岳川・新田沢によって形成された扇状地の連なりが耕作地として広がる。小屋の畑付近で西方に比高20mの段丘を見、そこから屈曲し、高畑・荒屋新町へと流れる。高畑付近には、合流する不動川と軽井沢との関連によって形成された3段の段丘が小規模に発達している。この上位2段に上位より荒屋Ⅱ遺跡・荒屋Ⅰ遺跡が立地する。荒屋新町の東側を流れ出ると、やや広い沖積地が広がる。ここに西方から曲田川と目名市沢が流れ込み、これらとの関係による段丘の発達があり、これらの面上に多くの遺跡が立地している。この沖積地をぬけ、東方に流向を変えた安比川は、石神・中佐井付近で右岸に比高35mの段丘をみつつ屈曲して流れる。そして浄法寺町から一戸町へと流れ、馬淵川と合流する。

米代川は、青森県田子町と安代町の県境の分水嶺付近に根石川としてその源を発する。周囲には、北方に県境の大倉森(896.9m)・東方に稲庭岳(1,078.0m)がそびえる。南流する米代川は、長者前・栗木田をぬけ、田山へと出る。ここに東方から流れ込む矢神川との関連でやや広い沖積地が形成されている。国鉄花輪線沿いに西方へ流向を変え、戸領・館市・兄畑を曲りくねる溪流(穿入曲流)となり流れ、秋田県鹿角市へとぬけ出る。

安比川と米代川の水系を分ける分水嶺は、北から黒森(727.3m)～上の木(768.5m)～貝梨峠(450m)～梨木峠(476m)～残決山(651m)～大尺山(741.2m)～高倉山(1,051.3m)～比山(1,037.8m)～鍋越峠(710m)～野沢欠峠(792m)～桂久保山(902.5m)～安比岳(1,493m)を結ぶ稜線である。この中で標高の低い峠は、貝梨峠と梨木峠である。

両水系の1次の川が、分水嶺付近で隣接して存在する。安比川水系の目名市沢と米代川水系の矢神川が、貝梨峠を分水嶺として東西へ流れ、また安比川水系の新田川と米代川水系の越戸川が、梨木峠を分水嶺として同様に東西に流れている。後述の方が前述に比し、沢沿いの傾斜

がゆるやかであり、梨木峠もその傾斜は急な所でも20度未満であり、多くは15度未満である。

このようなことより、分水嶺の中において最も越えやすい条件を備えているのは、梨木峠であり、古くは鹿角街道として、三代実録・元慶二年(878年)10月12日の条に秋田城に至る平安時代の重要な交通路とされている。また縄文時代の遺跡は、この沢沿いに多く分布していることをみれば、交通路としての重要さは、更に古くさかのぼることができる。

2. 扇畑 I 遺跡の立地

扇畑地域は、扇畑という地名が示す如く、扇状地によって形成されている。これは安比川に合流する新田沢・見岳川・深沢のいずれも小さな沢によって形成されたものであり、南側より赤坂田・寄木・扇畑となだらかな扇状地の連なりをみせる。

赤坂田駅後方には、中位段丘面が南北に細長く分布している。この面は標高410~415mで、河川面からの比高約30mである。この段丘面北側に深沢によって形成された扇状地が載っている。この扇状地は扇頂付近から主扇面を北側に向け、段丘の北方崖を覆う様に標高を低くしながら広がる。

この扇状地と連なる扇状地は、この北方の2地域にみられ、その1つは里の沢と三沢が合流する付近を扇頂とした見岳川による扇状地である。見岳川は、伏流せずに扇面の下刻をみせるもので、開析扇状地を形成している。見岳川河川面と扇面の比高は、約5mをはかり段丘崖が形成されている。主扇面は、扇頂から扇端までの長さ約550m、その比高約20mであり、なだらかな斜面となっている。扇端は、比高約6mほどで沖積面に漸移する。主扇面は北西にのびる。扇畑 I 遺跡は、主扇面の上位で見岳川による南方の段丘崖線から扇失にかけて位置し、標高は389~395mである。この見岳川北方の同一扇面上には、扇畑 II 遺跡が同様に位置する。他一方の扇状地は、新田沢によって形成されており、この川は現在伏流している。このため下刻は小規模である。この扇状地には、扇端が2箇所にみられ、扇頂から約350mと約500m付近である。この扇面は見岳川によるものと同様ななだらかな傾斜となっている。主扇面は北方に伸びる。

これら扇状地間の地域には、それぞれの扇状地の側扇、又は崖錐性の扇状地としての堆積がみられ、それによってこれら扇状地の連なりが形成されている。これらの扇面上には、他に赤坂田 I 遺跡・赤坂田 II 遺跡が立地する。

3. 周辺の遺跡

岩手県教育委員会がまとめた岩手県遺跡基本図(1980年)によれば、二戸郡安代町内には図版2に示すように安比川及びその支流、米代川及びその支流によって開析された谷に沿った段丘面に多くの遺跡が存在している。これらの遺跡はほとんど未調査である。遺跡基本図では一応それらの遺跡の包蔵物と時期を示している。遺跡基本図の遺跡の大部分は縄文時代のものであり、ほかには土器器を出土する遺跡、中世の館址、一里塚や経塚などもある。

これまでに発掘調査された遺跡を列挙すれば、昭和49年有矢野遺跡の一部試掘、昭和50年保戸沢遺跡の一部発掘調査（安代中学校体育館建設のため）、東北縦貫自動車道の建設にともなう赤坂田Ⅰ遺跡（昭和54・55年）・赤坂田Ⅱ遺跡（昭和54・55年）・安代寄木遺跡（昭和54年）・扇畑Ⅰ遺跡（昭和54年）・扇畑Ⅱ遺跡（昭和54・55年）・荒屋Ⅰ遺跡（昭和54年）・荒屋Ⅱ遺跡（昭和53・54年）・有矢野遺跡（昭和54年）・上ノ山Ⅹ遺跡（昭和54年）・越戸Ⅱ遺跡（昭和54年）・上ノ山館遺跡（昭和55年）・上ノ山Ⅶ遺跡（昭和55年）・上ノ山Ⅷ遺跡（昭和55年）・曲田Ⅰ遺跡（昭和55年）の発掘調査等がある。

調査された遺跡からみると、縄文時代の遺跡は赤坂田Ⅰ遺跡・赤坂田Ⅱ遺跡・扇畑Ⅱ遺跡・荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・有矢野遺跡・上ノ山Ⅹ遺跡・上ノ山Ⅶ遺跡・上の山Ⅱ・曲田Ⅰ・越戸Ⅱ遺跡等である。時期としては荒屋Ⅰ遺跡で早期の土器片が発見されたが、だいたいは中期・後期のものが多い。晩期も赤坂田Ⅰ遺跡・荒屋Ⅰ遺跡・有矢野遺跡で住居址が確認された。弥生時代の遺物は荒屋Ⅱ遺跡・有矢野遺跡・上ノ山Ⅷ遺跡等で確認されたが遺構は確認されていない。

土師器の遺構は赤坂田Ⅰ遺跡・扇畑Ⅰ遺跡・扇畑Ⅱ遺跡・有矢野遺跡・上ノ山Ⅹ遺跡・上ノ山Ⅶ遺跡等で確認された。これらはいずれも平安時代の遺跡と思われ、奈良時代のものはない。特に昭和55年度調査の上ノ山Ⅶ遺跡は平安時代の大きな集落址と考えられ、住居址のつくりなどが秋田県鹿角地方と似ており、鹿角地方の文化圏との関連が考えられる。

中世の遺跡としては上の山館の発掘調査がある。中世堅穴住居址や掘、犬走りなど築遺構の調査がされている。

4. 基本土層

扇畑Ⅰ遺跡の基本土層は、場所により若干の違いはあるが基本的には以下のような層序で構成されている。遺構の検出面はⅡ層中である。なかには粗掘時の重機による掘り過ぎや、遺構の埋土とⅡ層が酷似したためⅢ層上面で遺構検出を行なったものもある。Ⅵ層以下については、作業困難の為掘削を中止した。

Ⅰ層 黒色土で層厚は15～25cm。A・B区は腐植土、C・D・E区は耕作土である。

Ⅱ層 黒褐色土で層厚は5～20cm。ところにより十和田a降下火山灰層がレンズ状に入っている。十和田a降下火山灰層の層厚は最大5cm位である。風倒木痕はこの限りでない。

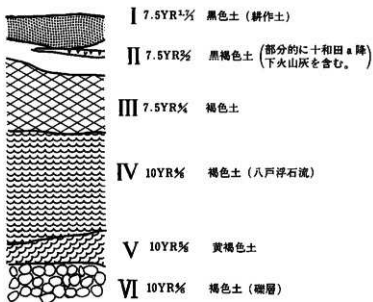
Ⅲ層 褐色土で層厚30～40cmである。

Ⅳ層 褐色土で層厚60～70cmである。八戸浮石流とのことで、黄褐色のバミスが上位は細粒下位ほど粗粒となって含まれている。

Ⅴ層 黄褐色土で層厚10～15cmである。砂質であり、Ⅳ層との境界は明瞭でない。

Ⅵ層 褐色土を含む礫層で層厚は不明である。

挿図2 扇畑II遺跡基本土層模式図



IV. 検出された遺構と遺物

1. 堅穴住居址

当遺跡で検出された堅穴住居址数は11棟である。いずれも表土である耕作地等の黒色土を除去することによって検出された。従って耕作や木根による攪乱が多く、それが遺構にまで及ぶ所もあった。このような所では遺構に伴なうと思われる土師器片が表面採集された。

耕作土から続く土層断面を見ると、耕作土と褐色土の間に黒褐色土層があり、この黒褐色土層中に十和田 a 降下火山灰が認められる所もあった。十和田 a 降下火山灰は遺構の埋土中にも多く認められ、遺構の時代判定の重要な要素になるものと考えられる。

これらの堅穴住居址の掘り込み面は、褐色土の上位にある黒褐色土層中であつたようである、しかし、この面での住居址検出は埋土と暗褐色土の区別がつけにくく、結局褐色土の上面で遺構検出を行なう結果となつたものもある。

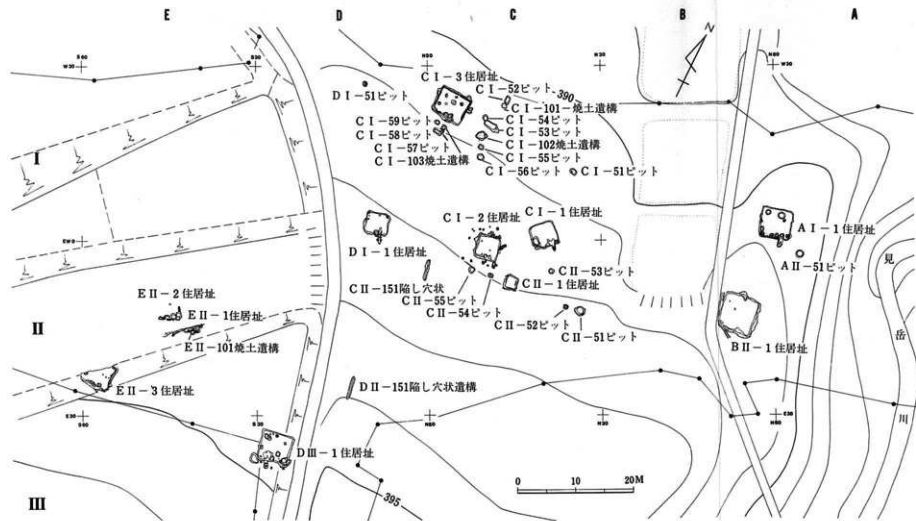
遺跡の西側は、水田となつており、開田工事の際に破壊された遺構も検出されている。また検出された堅穴住居址の中には、焼失を受けたものがあり、屋根材と思われる炭化材の残存が認められた。更にカマドを設けていないものやカマドの存在が不明瞭なものもあつたが、これらのものも遺構の形状、大きさ等の検討をした結果、堅穴住居址として一括して扱うことにした。各住居址はかなりの間隔で配置されており、重複した遺構はなかつた。これらの住居址群は検出面や形態が類似することからほぼ同時期と思われる。

出土遺物は遺構にともなう土師器がほとんどで、ロクロ使用の坏、甕、ロクロ不使用の甕などである。須恵器は破片のみであるが厚手のものと薄手のものが出土している。その他には磁石、炭化した木製構・炭化した堅果類、刀子などが出土している。

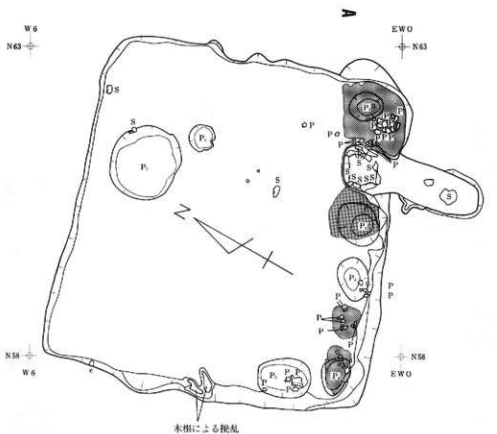
A1-1 住居址

【遺構】(図版4・5、写真図版2・3)

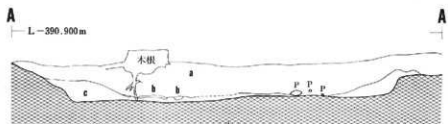
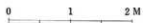
調査区域の東端A I 区の南西隅に検出された住居址である。規模は、床面上で、南北径約480cm、東西径約520cmで長方形を呈している。埋土は二層に大別できる、上層は表土から続く腐植質の黒色土であり、下層は暗褐色土である。南側の壁際に堆積している埋土には十和田 a 降下火山灰と思われるものがブロック状に含まれており、上層の黒色土の下位にも同様の火山灰がブロック状に認められる。床面はかなり堅くしまつており、はり床ではない。床面からも住居址周囲からも柱穴は確認できなかった。東側の壁は上縁付近が掘り過ぎで正確ではないが床面



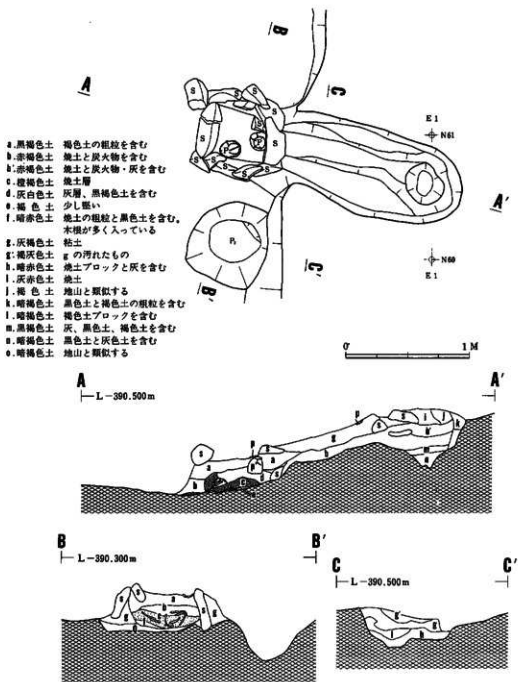
図版3 遺構配置図



- a. 黒色土 木根の多い腐植土
- b. 灰白色土 十和田・陸下火山灰のブロック
- c. 暗褐色土 濡った褐色土が混じる



図版4 A1-1住居址平面図・埋土断面図



図版5 AI-1住居址 カマド平面図・断面図

に対して72度の角度で立ちあがり、床から検出面までの壁高は35cmである。以下、北壁は90度で壁高25cm、西壁は47度で壁高30cm、南壁は67度で壁高35cmである。周溝は検出されていない。

カマドは南壁の中央から約120cm東寄りに構築されている。煙道部分は押しつぶされた形で残存しており、袖部の残存状態は比較的良好である。袖は25×25×10cm位の平たい直角礫10数個を床面に直接置くか或いは10cm位埋めこんで燃焼部全体をほぼ円形に包みこむ様に形づくったものを芯として、土器片と粘土でそのまわりをかためてつくっている。燃焼部幅は約47cm、カマド幅は約77cmである。燃焼部内には完形甕、復元可能甕があった。焚き口の天井石(15×20×450cm)は木根によりほぼ中央から割れて袖の上にあった。燃焼部から煙道に移る部分は急な立ちあがりになっており、その部分に礫(20×10×10cm)があったが、その性格については不明である。煙道は南壁に垂直ではなく西側に10°ばかり傾いており、向きはN-12°-Wである。長さは約145cmで約13°のゆるい上り勾配である。煙道部は掘り込み式で粘土でかためて構築しており礫などの芯材はなかった。煙道と考えられる部分の埋土は焼土と炭化物の混じる赤褐色土である。煙出しの部分は礫を芯として粘土でかため、径32cm深さ45cmほどのピットを形づくっている。このピットの底面は煙道下面より15cmほど落ちこんでいる。

床面から検出されたピットは6コである。P₁(径56×47cm・深さ15cm)、P₂(径78×64cm・深さ30cm)、P₃(径70×50cm・深さ15cm)、P₄(径61×46cm・深さ15cm)、P₅(径85×64cm・深さ15cm)、P₆(径120×110cm・深さ15-17cm)である。P₁の埋土は炭化物と灰の混じった赤褐色の焼土で底面ほど赤味を帯びており、形状は楕円形で時計皿状である。P₂の埋土は軟かい暗褐色土で炭化物や焼土が粒状になってまばらに混合している単層であり、形状はほぼ円形で撻鉢状である。埋土の中程からは鉄滓が出土した。また土師器片もあった。P₃の埋土は焼土・灰・炭化物・灰黄色粘土が粒子状(径5-10mm)に混じり合い堅くしまっており、形状は楕円形で時計皿状である。この中から土師器片が出土した。P₄の埋土は炭化物と灰の混じった赤褐色の焼土よりなる単層であり、形状は楕円形で時計皿状である。これらのピットP₁、P₂、P₃の西側、P₄の上面付近(南側壁際一帯)には焼土が厚さ3-4cmで堆積しており、炭化物の細片、灰、土師器片が混入している(図版4参照)。P₅の埋土は軟かい暗褐色土で単層であり、形状は楕円形で壁は垂直に近い。土師器片が出土した。P₆の埋土は褐色土の小ブロックと炭化物のまじる暗褐色土の単層であり、その中には更に十和田a降下火山灰と思われるものが2-3cmの小ブロックでわずかに混合している。形状はほぼ円形で壁面はほぼ垂直に立ちあがる。このピットの壁及び底面は木根による攪乱を受けている。

【遺物】(図版27~31、写真図版22・23)

この住居址の遺物は、土師器、磁石、鉄滓である。土師器は坏、高台付坏、甕で構成されるが、完形若しくは復元できたものは殆んどカマド及びその周辺からの出土である(④⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑮)。床面出土のものは数が少ない(①②③)。

坏形土器はロクロ不使用のものとロクロ使用のものとある。ロクロ不使用(A類)のものは厚手で器壁の傾斜が60°ぐらいで直線的に立ちあがっており、外面内面共ヘラミガキし内面は黒色処理している(②)。ロクロ使用のものは内面ヘラミガキ黒色処理したもの(BⅠ類)(⑩⑫)と黒色処理をしないもので底部切離しが回転糸切り無調整のもの(BⅡa類)の二大別ができる。BⅡa類(④⑤⑬)は体部外面にらせん状に2~3重の条痕が認められる。そのうち④は他の坏より大型で器高の割合が大きく埴に近い(径高指数43.8)。高台付坏は台部のみ1例の出土である、底部再調整後高台をはりつけロクロ成形したらしく切離しは不明である。

甕形土器もロクロ不使用のものとロクロ使用のものとある。ロクロ不使用のものは比較的大型のもの(AⅠ類)が多い。①は口縁が外反しており、頸部に浅い溝が一周して小さな段が出来ている。⑩は積み上げの痕が明瞭に残っており、その上をナデたものと思われる、底部には木葉痕があり、口縁部はつまみ出してヨコナデで仕上げている。⑫は口縁がヨコナデで調整されており、頸部にはH字状溝が一周している。これら①⑩⑫⑬は全て外面に粘土状のものが塗り着けられている。③は底部及びその周辺部が残存するのみである、外面にケズリの痕がある。⑭は外面にケズリの痕も見えるがナデを主体に調整されている。これらロクロ不使用の甕形土器は胎土に細礫や極粗粒砂を多く含み、仕上げが粗雑である。

ロクロ使用の甕は器高20cm以上のもの(BⅠ類)と器高10~20cmのもの(BⅡ類)がある。BⅠ類のものは口縁部のみの残存である。これらは口縁が内湾している(⑩⑫)。BⅡ類のものは口縁が外反している。⑩は胴がふくらむ形である、内外面とも炭化物が付着している。⑬も同様の形状である。②は外面に黒色油脂状のものが付着している。胴は相当の丸みをもったふくらみかたをしている。その他半製品の状態でおしつぶした様な土製品が出土した。また鉢形土器の破片が2片あり、CⅠ-2住居址出土のものと接合できた。手づくねで形を整えた底が残っている。

磁石は半折で出土し、材質は凝灰岩であり、表裏2面に使用痕があった。

鉄滓はビット(P₂)の埋土中からの出土であり、海绵状になっている。重量は478g。

※1 土器の分類についてはP.71。

※2 器高÷口径×100、岩手県埋文センター文化財調査報告書第8集参照。

B II - 1 住居址

【遺構】(図版6・7、写真図版4・5)

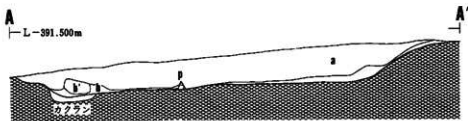
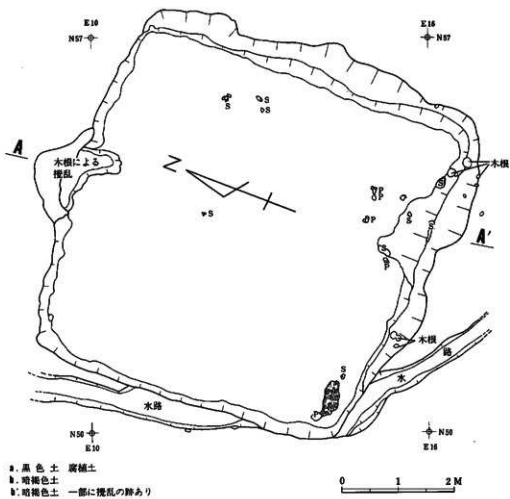
この住居址はA I - 1 住居址の南側にありB II 区の東端に検出された。規模は、床面で、南北径東西径共に約580cmの歪んだ方形である。南西隅の壁は農業用水路のため上端が破壊を受けている、また北壁中央付近は木根による攪乱を受けている。埋土は表土から連続している腐植質の黒色土と下層の暗褐色土の二層に大別される。下層暗褐色土全体に灰黄色の十和田 a 降下火山灰がブロック状に混入しており、西側壁際に堆積している埋土には床面から10cmぐらい上の部分に厚さ3cm前後の十和田 a 降下火山灰が幅10~15cmでブロック状に認められた。北西隅付近には半径70cmほどの扇形状に堅い砂質の黄褐色土があったが、下面に暗褐色土などがあったことから、壁面の崩落と考えられる。また同様の堆積が南西隅付近にも認められ、その下面に暗褐色土と板状の炭化物(24×60cm)があった。床面は木根による攪乱やわずかな凹凸が観察される程度でほぼ平坦で堅くしまっている。柱穴は床面にも周囲からも検出できなかった。東側の壁は床面に対して84度で外傾し床面から検出面までの壁高は50cmである、以下北側の壁は80度で壁高35cm、西壁は83度で壁高70cm、南壁は60度で壁高50cmである。周溝は検出されない。

カマドは南壁中央より約50cm東寄りに位置し、袖の部分は地山が崩れ覆い被さった形で検出された。袖は扁平な礫(20×30×10cm位)の基部を床面に置かずにかわずかに埋め込んだものを芯とし、その外側を小礫(10×7×5cm位)で押さえ、それをシルトでかためて構築している。燃焼部幅は約35cm、カマド幅は約65cmである。燃焼部の中には復元可能な甕があった。煙道は南壁に垂直でなく西側に8°ほど傾いており、向きはN-11°-Eである、長さは約120cmで約20°の上り勾配である。煙道部は天井部、側面部を含め安山岩とシルト・粘土で構築している、構築方法は地山シルトを面そのままかわずかに掘り込んで扁平な礫をたて、更に外側を小礫(10×7×5cm位)でおさえ、すきまを粘土でうめ、周囲をシルトでかためている。天井部はこの側面部に30×40×10cmぐらいの礫を渡し、すきまを粘土とシルトでうめている。煙出し部はわずかに掘り込んであり、底を抜いた甕を倒立させ周囲を粘土でおさえたと使用したと思われる。焚き口の部分は時計皿状に凹んでおり、径60cm、最大の厚さ3cmぐらいの焼土があった。

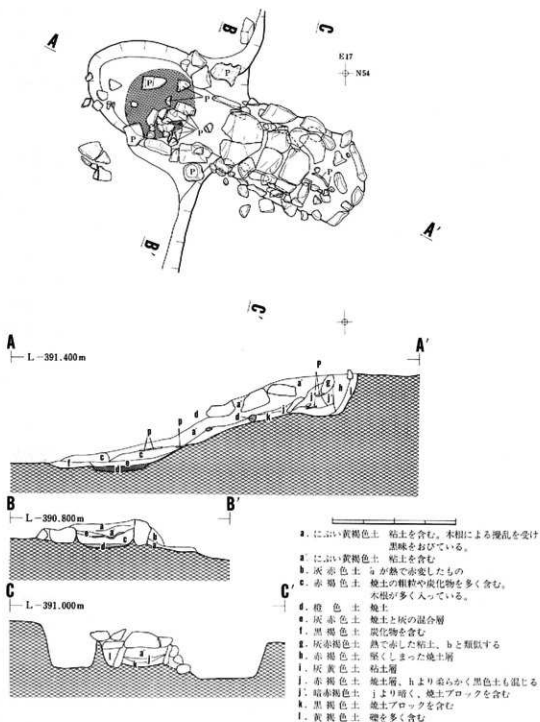
【遺物】(図版31-34、写真図版23・24)

この住居址の遺物の大半は土師器である。ほかには須恵器の破片が数片出土している。床面出土のものは坏と高古付坏である(33③④⑤)。カマドから出土したものは甕が多く、坏は一点のみである(36⑦⑧⑨⑩⑪)。他は埋土中よりの出土である。

環形土器はロクロ不使用(A類)とロクロ使用(B類)とある。A類は1例だけであるが、



図版 6 B II-1 住居址 平面図・埋土断面図



図版7 B II-1 住居址カマド平面図・断面図

厚手で、内外ヘラミガキを施し、内面は黒色処理してある。器壁は60° ぐらいの傾斜で直線的に立ちあがる(㉓)。B類も内黒のものが多い。㉔は内面ヘラミガキの上黒色処理してある。底部を欠くので高台付か否かは不明である。㉕は底部だけの出土である、底部切離しは回転糸切り、内面はヘラミガキの上黒色処理してある。(以上2個体はB I類) ㉖は黒色処理をしていない、底部切離しは回転糸切りで(B II a類)、体部下半には1周する浅いらせん状の条痕がある。この住居址の坯は高台付が多く、いずれも内面ヘラミガキを施し黒色処理している。㉗は底部切離しが回転糸切りで、再調整後台部をはりつけ成形している。㉘は台部が完全に残存している。底部切離しは再調整により不明である。この㉗㉘は共に坯部が浅くて口縁が開いた形になっている。㉙は坯部が深く坑型に近い。底部切離しは回転糸切りで台部をはりつけて成形している。

変形土器はロクロ使用のものも破片で若干出土したが、殆んどがロクロ不使用で、大型である(A I類)。㉚は口縁をつまみ出してヨコナデ調整し外面をヘラケズリとナデ、内面をナデ調整しており、胴部がふくらんで器高が比較的小さい。㉛は粘土紐を積み上げて成形した痕が残っているが巻上げか輪積か不明である、ナデを主体に調整し、外面底部はケズリである。形は長胴型である。㉜は口縁部が、胴部と切れ目なく成形され、自然に開く形になっている。ナデ主体に調整されている。㉝は頸部に口縁部と体部を区分するU字状の浅い溝が一巡している。㉞は刷毛目が外面に見られるがナデを主体として調整されている。㉟は口縁をつまみ出してヨコナデで調整、器面全体をナデ調整している。㊱は播鉢風口縁になるほど開くような形をしており、ナデ調整で仕上げている。これらの変形土器は胎土に細礫、粗粒砂を多く含む粗製である。また㉚、㉜、㉞は外面に粘土状のものを塗り着けてある。

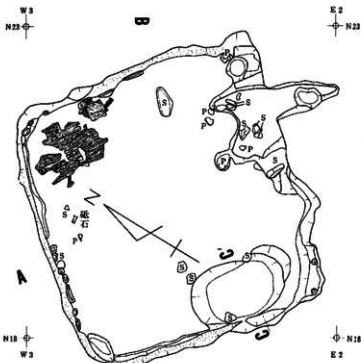
須恵器破片は外面にタタキ目があり、大型の壺などの一部と思われる。

C I - 1 住居址

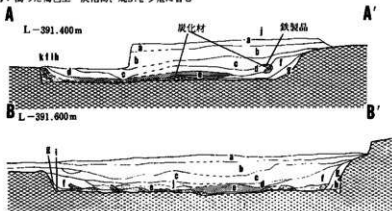
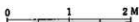
【遺構】(図版8~10、写真図版6~8)

当住居址はC I区とC II区の境界線上の東側に位置している。遺構の北側は、重機を使用していたの掘削時に掘り過ぎてしまい、壁の上部は破損を受けている。当住居址は焼失を受けており、検出時には壁際に沿って炭化材が検出された。平面形はほぼ隅丸長方形を呈する。規模は床面上で、南北方向に405cm、東西方向に370cmを測る。

埋土は3層に大別され、上位は耕作土から続く黒色土、中位は十和田a降下火山灰を含む黄褐色土、下位は焼土と炭化物を多量に含む暗赤褐色土により構成されている。埋土の堆積状態には特に偏りは見られず、壁上縁付近から中央部に向かって堆積している。埋土下位にある焼土は住居址の中央部付近を中心に分布している。焼土の厚さはカマド付近が厚く、12cmを測る

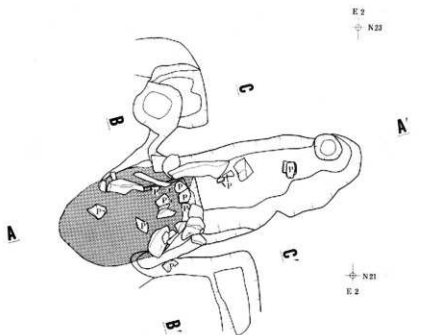


- a. 黒色土 耕作土
- b. 黒色土 木根が混じる。淡い褐色のバミスをまばらに含む
- c. 黄褐色土 十和田a降下火山灰を含む
- d. 黒褐色土 淡い褐色のバミス、焼土ブロックを含む
- e. 赤褐色土 焼土
- f. 濁った褐色土 褐色土の小ブロック、淡い褐色のバミス、焼土、炭化物を含む
- g. 暗赤褐色土 焼土と炭化物を多量に含む
- h. 暗褐色土 焼土粗粒や十和田a降下火山灰を含む
- i. 暗褐色土 淡い褐色のバミスや褐色土ブロックを含む
- j. 濁った褐色土 炭化物、焼土を多量に含む



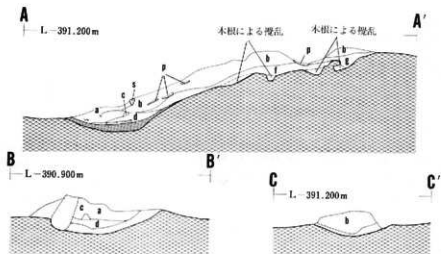
- a. 暗褐色土 焼土、炭化物、十和田a降下火山灰、褐色土を含む
- b. 暗褐色土 炭化物、焼土の粗粒、褐色土ブロックをまばらに含む濁った褐色土

図版8 CI-1住居址 平面図、埋土断面図

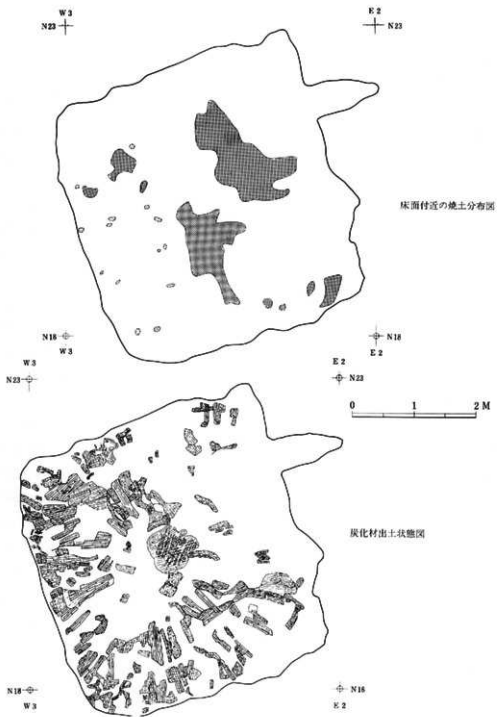


- a. 暗赤褐色土 遺土の粗砂を含む
- b. 橙 色 土 火熱を受けて赤変した粘土
- c. 黒 褐色 土 木根による攪乱と思われる
- d. 灰白褐色土 灰の層
- e. 暗赤褐色土 炭化物、焼土をまばらに含み、堅くしまっている
- f. " 炭化物、焼土を含み、柔らかい
- g. 灰 褐色 土 炭化物、焼土、ブロック、土和田 a 降下火山灰を含む

0 1 m



図版9 C I - 1 住居址 カマド平面図、断面図



図版10 C I - 1 住居址 (床の面付近の焼土分布図・炭化材出土状態図)

所もある。焼土の下位や焼土と焼土の間には炭化材が多く検出されている。炭化材の方向は壁際から住居址中央部に向かい、放射状に並んでいる。炭化材の横断面形は、円形または楕円形を呈し、直径は10cm～15cmを測る。また、中央部の焼土の下位や一部の壁際からは炭化した笹のようなものや樹皮のようなものが検出された。これらの炭化材の樹種は、柱材がケヤキ、笹のようなものはクマザサ、樹皮はナラの樹皮と鑑定された。炭化材の上・下位からは、加熱を受けて赤変した十和田 a 降下火山灰が検出されている。この十和田 a 降下火山灰は、炭化材の下位の方が厚く堆積しており、壁際で4cmを測る。火山灰の厚さは中央部に近づくほど薄くなり、壁際から150cm程中央に寄った所では認められなくなる。

床面は僅かに起伏があり、堅くしまっている。北西隅付近には炭化した板材が3枚検出された。板材の方向は東側壁にほぼ並行である。大きさは3枚ともほぼ同じで、平均寸法は114cm×29cm×3cmである。この板材の樹種はナラと鑑定された。柱穴は検出されていない。壁は床面に対して、東側で74度、南側で45度、西側で89度、北側で83度を示す。床面から検出面までの高さは、それぞれの壁の中央部付近で、東側32cm、南側40cm、西側41cm、北側22cmである。北側壁の大半と東西両壁の一部は、加熱を受けて赤色に変化している。この赤色に変化した部分は、壁の中位から上位にかけての部分で、厚さは2mm～5mmである。周溝は北側の壁際と、東西の壁際に設けられており、一部はとぎれてピット状になっている。周溝の幅は開口部で10cm～15cm、底部で5cm～10cm、深さは住居址の床面から10cmを測る。

カマドは南壁の中央部から90cm東に寄った位置に構築されている。煙道の方向は南壁にほぼ垂直でN-50°-Wを示す。煙道の傾斜は20度の上り勾配で、長さは120cmを測る。袖の幅は50cm、煙道部の幅は燃焼部側で45cm、煙出し部側で35cmを測り、燃焼部側から煙出し部に向かって狭くなっている。袖は壁からの削り出して、板状の礫と粘土で補強し、天井部も礫と粘土で作られている。袖の上に覆されていたと思われる粒径50cm×25cm×20cmの礫は、焚口部の北東1mの床面上に置かれている。煙道は掘り込み式で、焚口部側に板状の礫と土器片が使用されている他は、ほとんど粘土で構築されている。煙出部には、直径22cm、深さ5cmのピットが設けられている。燃焼部は床面よりも僅かに低く、焼土が形成されている。焼土の広がり、110cm×70cmの楕円形を呈し、厚さ6cmを測る。カマドの埋土は、焚口付近が主に焼土を含む暗赤褐色土、煙道部は焼土・炭化物をまばらに含む暗褐色土により構成されている。カマドに使用されていた礫は安山岩系のものである。

住居址の南西隅付近には、不整な隅丸長方形のピットが設けられている。壁は外反ぎみに立ち上がる。底部はほぼ平坦である。規模は開口部で155cm×95cm、底部で110cm×75cm、深さは住居址の床面から50cmを測る。埋土の上位には壁際から床面まで連続する炭化材や焼土が堆積している。埋土は2層に細分されるが、主に暗褐色土により構成され、焼土・炭化物・土

師器片が含まれている。カマドの東側の住居南東隅には、ほぼ円形のピットが設けられている。開口部径35cm、深さ17cmを測る。ピットの埋土は、住居址の床面付近の埋土と連続した暗褐色土により構成されている。

【遺物】(図版35～37、写真図版25・32・33・34・35)

当住居址の出土遺物としては、土師器の環形土器、埴形土器、甕形土器、須恵器片、砥石、木製品、鉄製品、鉄滓等が得られている。㊸、㊹は床直、㊺～㊻はカマド、㊼～㊾、㊿～㊽は埋土から出土したものである。

環形土器は2点(㊼・㊽)ともロクロ使用で、黒色処理は行なわれていない。底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整は行なわれていない(B II a類)。㊽の体部には細い溝が、底部から口縁部に向かってらせん状に施されている。

埴形土器としては㊾と㊿がある。㊾は完形品で、㊿は一部に破損を受けている。両者とも同形態で、法量もほぼ同量である。ロクロ使用で、底部切り離し技法は回転糸切りである。再調整は行なわれていない。

甕形土器はロクロ使用のものとロクロ不使用のものが得られている。ロクロ不使用のものには器高20cm以上のA I類(㊿㊿～㊿)と器高10cm～20cmのA II類(㊿㊿㊿)がある。㊿は外面に粘土紐の積み上げ痕が残っている。㊿は底部がケズリ調整で上げ底となっている。外面には輪積みの痕が僅かに残り、一部に炭化物が付着している。㊿は外面に粘土状のものが塗り付けられたように付着している。㊿は内外面ともにナデ調整が行なわれている。外面口頸部には粘土紐の積み上げ痕が残っている。㊿は外面に粘土状のものが塗り付けられている。底部には中央部から放射状に広がる刻線が施されている。㊿は内外面ともにナデ調整が行なわれている。外面の一部には炭化物が付着しており、内面には僅かに粘土紐の積み上げ痕が認められる。㊿の底部はケズリ調整で平坦になっている。外面の底部付近に黒斑が認められる。㊿は波状口縁を呈し、口縁部内面には炭化物が付着している。

ロクロ使用の甕形土器は器高10cm～20cmのB II類である(㊿㊿㊿)。㊿は内外面ともにナデによる再調整が施されている。底部もナデ調整が行なわれており、切り離し技法は不明である。㊿の底部切り離し技法は回転糸切りで、再調整は行なわれていない。

須恵器片(㊿)は口縁部付近の破片で、ロクロ使用の痕が残る。内外面には自然釉がかかっている。

砥石(㊸)は断面が四角形で、四面とも使用されている。中央部は磨り減って湾曲している。石質は凝灰岩と鑑定された。

鉄製品は刀子と思われるもの(㊿)とその他2点(㊿㊿)が得られている。これらはカマド付近の埋土下位から、ほぼ近接して出土している。

鉄棒はカマド付近の埋土下位から2点出土している。形状は海绵状を呈している。重量は109gと37.4gである。

木製品としては、焼失を受け炭化した櫛が1点出土した。櫛目が細かく精巧なつくりである(最大厚0.7cm×幅8cm×高さ4cm)。材質については、「木目はケヤキに類似するが、それ以上に堅い木である、例えばツゲかも知れない。」という鑑定を得た。

C I - 2 住居址

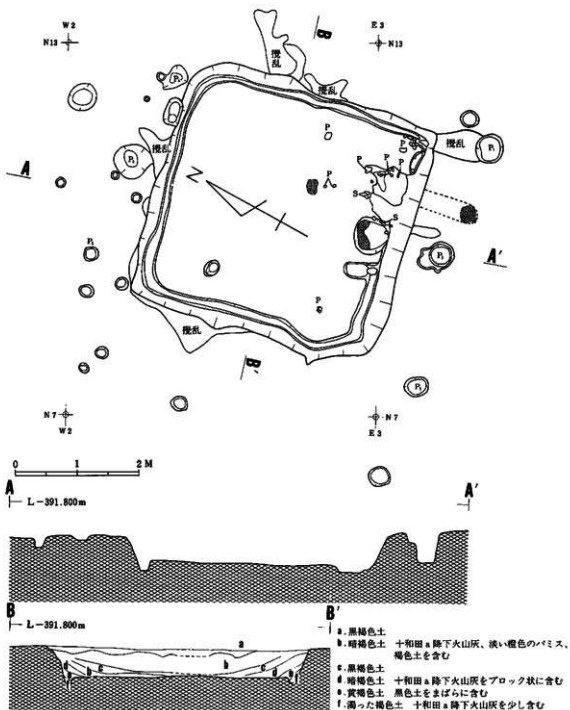
【遺構】(図版11・12、写真図版9)

当住居址はC I区とC II区の境界線上、C I - 1住居址の西側に位置している。遺構の東側には木根による攪乱が多く見られ、壁の一部が破損を受けている。平面形は、南東隅付近が僅かに張り出す方形を呈する。規模は床面上で、東西・南北両方向ともに340cm前後である。埋土は、壁際から床面中央部付近にかけてレンズ状に堆積する暗褐色土が大半を占めている。その下位には、壁際から床面中央部付近にかけて、黒色土が堆積している。周溝には十和田a階下火山灰を含む暗褐色土が堆積している。

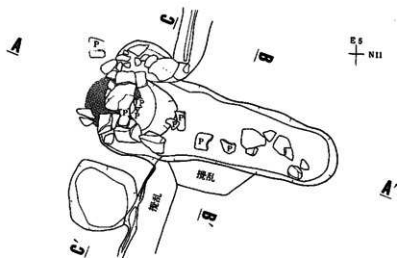
床面は平坦で堅くしまっている。柱穴は遺構内では検出されなかった。遺構外の北側と南側の壁際から僅かに離れた位置から柱穴と思われるビットが6本検出されている。南側の3本($P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$)は深く、北側の3本($P_4 \cdot P_5 \cdot P_6$)は浅い。各ビットから住居址の壁上縁までの距離・開口部径・検出面からの深さは以下ようになる。 P_1 (60cm・30cm・35cm)、 P_2 (60cm・40cm・56cm)、 P_3 (100cm・35cm・49cm)、 P_4 (20cm・35cm・15cm)、 P_5 (50cm・55cm・12cm)、 P_6 (60cm・25cm・26cm)。南側の3本と北側の3本は一線に並び、 P_1 と P_4 、 P_2 と P_5 、 P_3 と P_6 はそれぞれ対応している。遺構の東側および西側からは柱穴らしきものは検出されていない。

壁は床面に対して、東側で74度、南側で76度、西側で76度、北側で80度の角度を示す。床面から検出面までの高さは、東側で50cm、南側で45cm、西側で45cm、北側で35cmである。壁際には、南西隅を除き周溝が設けられている。周溝の幅は開口部で10cm~20cm、底部で5cm~15cm、深さは床面から15cm~20cmである。

カマドは南側壁の中心から80cm東寄りに構築されている。煙道の方向は南側壁にほぼ垂直でN-12°-Wを示す。傾斜は20度の上り勾配で、長さは120cmを測る。両袖間の距離は45cm、煙道の幅は燃焼部側で45cm、煙出し部側で40cmを測り、燃焼部から煙出し部に向けて僅かに狭くなっている。袖は床面を5cm~10cm掘り下げて、粒径30cm×30cm×10cm位の板状の礫を立て、小礫や土器片と粘土を周囲に貼りつけて作られている。両袖の上には粒径50cm×20cm×10cm位の板状の礫が渡されていたようだが、検出時にはこの礫は割れ落ちていた。燃焼部は床面とほぼ同レベルで、焼土が形成されている。焼土の広がり45cm×40cmの楕円形状を呈し、厚さは

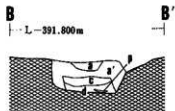
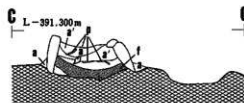
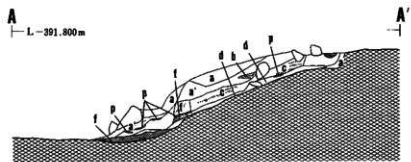


図版11 CI-2住居址 平面図、埋土断面図



- h. 濁った黄褐色土 a'の汚れたもの
- a'. 黄褐色土
- b. 暗褐色土
- c. 赤褐色土 焼土層a'の崩落したものを含む
- d. 暗赤褐色土 焼土や灰、スス状の炭化物が混じる
- e. " dに類似するが焼土の含有量が少ない
- f. 橙 色 土 焼土アロック
- g. 黒褐色土 炭化物を含む
- h. 橙 色 土 灰と焼土を含み、少し白みがかっている

0 1 M



図版12 CI-2住居址 カマド平面図、断面図

5cmである。煙道は掘り込み式で、一部に土師器片を含むが、ほとんど粘土だけを使用して作られている。煙出し部の直下はほぼ水平で、ビットは設けられていない。煙出し部上部の周囲には粒径10cm大の礫が4個並んでいた。カマドの埋土は、焚口部から煙道部まで連続しており、主に暗赤褐色土で構成され、焼土・灰・炭化物が含まれている。

カマドの西側には時計皿状のビットが設けられている。平面形はほぼ円形を呈し、開口部径50cm、床面からの深さ20cmを測る。埋土は主に焼土と炭化物から構成され、土師器片も含まれている。

【遺物】(図版38～40、写真図版26・34)

当住居址の出土遺物としては土師器の坏形土器と高台付坏、変形土器、鉢形土器、須恵器片、鉄滓等が得られている。㉔と㉕は床面から、㉖と㉗～㉙はカマドから、㉚～㉜は埋土から出土したものである。

坏形土器は全てロクロ使用で、内面に黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りで無調整のB I a類(㉖、㉗、㉘)と、底部切り離し後再調整が施されているB I c類(㉙)がある。㉗は僅かに上げ底ぎみになっている。㉘には墨書が認められ、「干」と判読できるようである。㉙は胎土に金雲母が含まれている。

高台付坏(㉚)は台部を貼り付け、底部をヘラ状工具で調整した後、ロクロを使用して台部を調整している。そのため坏部の切り離し技法は不明である。体部には、細い溝が底部から口縁部に向かってラセン状に巡っている。

変形土器はロクロ使用のものและไม่使用のものがある。ロクロ使用の㉛は器高が10cm～20cmでB II類に属している。ロクロ不使用の変形土器は器高が20cm以上のA I類(㉜・㉝・㉞～㉟)と器高が10cm～20cmのA II類(㊱)がある。㉜と㉝は口頸部に2条の浅い溝が巡り、小さな段が形成されている。㉞と㉟には外面の一部に粘土紐の積み上げ痕が残っている。㉜・㉝・㉞・㉟は外面に粘土状のものがナデつけられたように付着している。㊱は口唇部付近と底部付近を欠損しており、詳細は不明である。胎土には粒径2mm～5mmの砂礫が多く含まれている。

鉢形土器(㊲)は当住居址のカマドから出土した破片とA I-1住居址のカマドから出土した破片が接合したものである。外面に僅かに積み上げ痕が残っている。

須恵器(㊳)はロクロ使用のもので、変形土器の一部と思われる。

鉄滓はカマド付近の埋土から出土したもので、形状は海綿状を呈している。重量は51.6gである。

C I - 3 住居址

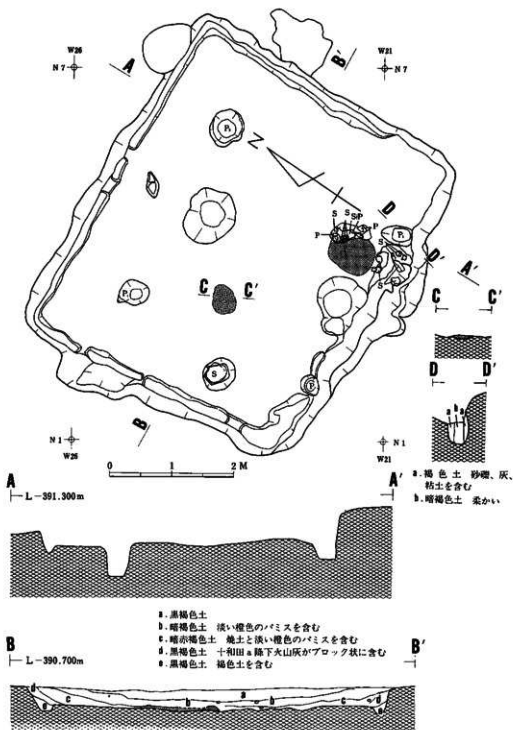
【遺構】(図版13・14、写真図版10・11)

当住居址はC I - 2住居址の東側に位置し、十和田 a 降下火山灰の堆積している風倒木痕を切って構築されている。平面形はほぼ長方形を呈し、床面での規模は、東西方向に525cm、南北方向に432cmを測る。埋土は5層に大別される。上位のa・b層は主に黒褐色土により構成され、中位から下位にかけてのc層は焼土と淡い橙色のバミスを含む暗赤褐色土により構成され、壁上縁付近から床面中央部に向かってレンズ状に堆積している。下位のd・e層は主に黒褐色土により構成され、壁際から床面あるいは周溝にかけて三角形に堆積している。住居址中央部西寄りには、c層から床面下5cmまで連続する焼土が認められる。この焼土は現地性のもので、住居址が廃棄されてから後、c層の堆積し始めた頃使用された焼土遺構の可能性がある。南東隅付近のc・d層には、礫や土師器片が土層の傾斜に沿うような形態で検出された。

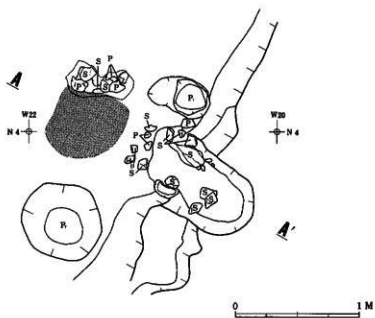
床面には起伏があり、南側壁付近では礫層の一部が露出している。柱穴は4本検出されている。そのうちの2本は、北壁の両端から、ほぼ対角線上を中央に向かって160cmずつ寄った位置に設けられている。残りの2本の柱穴は南壁の両端から南壁中央部に向かって120cmずつ寄った壁際に設けられている。各柱穴の開口部径と検出面からの深さは、P₁(50cm×30cm、48cm)、P₂(30cm、46cm)、P₃(55cm、54cm)、P₄(50cm×40cm、62cm)となる。ピットの埋土は粒径3cm~7cm位の礫が混じる褐色土により構成され、堅くしまっている。P₁では柱の据え方と思われる柔かい黒褐色土が認められた。据え方の幅は10cm位である。壁は床面に対して、東側で79度、南側で80度、西側で70度、北側で75度の角度を示す。床面から検出面までの高さは、東側で27cm、南側で45cm、西側で30cm、北側で24cmである。壁際には、南東隅付近を除き、周溝が設けられている。周溝の幅は開口部で10cm~20cm、底部で8cm~15cm、深さは床面から10cm~20cmを測る。

カマドは南側壁の中心から75cm東寄りに構築されている。焚口部付近は破損された状態で検出され、ほとんど原形を留めていない。僅かに残存する袖は礫と土器片を芯とし、小礫混じりのシルトを貼り付けて作られている。燃焼部は床面とほぼ同レベルで、焼土が形成されている。焼土の広がり70cm×50cmの不整楕円形を呈し、厚さは10cm位である。煙道の方向は南壁にほぼ垂直で、N-4°-Wを示す。傾斜は22度の上り勾配で、長さ70cmを測る。幅は燃焼部側で35cm、煙出し部側で30cmを測り、燃焼部側から煙出し部側に向かって僅かに狭くなっている。煙道の構築は掘り込み式で行なわれ、粒径32cm×25cm×10cmの板状の礫を立て、シルトで隙間を充填して作られている。一部に礫の抜き取り痕と思われる小ピットが認められる。煙道部の埋土は主に暗赤褐色土で構成され、焼土と炭化物が含まれている。

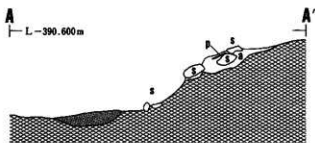
遺構内には柱穴以外にピットが3基検出されている。カマドの西側には不整楕円形の浅いピットが設けられている。規模は開口部径90cm×75cm、床面からの深さ15cmを測る。埋土は2層に大別され、上層は褐色土、下層は暗褐色土により構成され、いずれの層にも焼土・炭化物



図版13 CI-3住居址 平面図・埋土断面図



s. 暗赤褐色土 焼土、炭化物を含む



図版14 CI-3住居址 カマド平面図・断面図

が含まれる。下層から灰黄色粘土の小ブロックと土師器片が得られている。遺構内中央部北寄りには時計皿状のビットが設けられている。規模は開口部径95cm×80cm、深さ10cmを測る。埋土は炭化材・焼土・灰を含む暗褐色土で構成されている。埋土中から土師器片が得られている。西側の壁際には、ほぼ円形の平面形を呈するビットが設けられている。ビットの壁はほぼ直立する。底部には直径15cm、深さ25cmの円筒状の小ビットが設けられている。ビットの規模は、開口部径50cm、深さ20cmである。ビットにはその大きさとほぼ同じ大きさの粒径40cm×20cm×10cmの板状の礫が入っており、底部の小ビットの蓋を呈し、その小ビットは中空であった。礫の周囲の埋土は、暗褐色土で構成されており、埋土中から土師器片が出土している。

【遺物】(図版41・44、写真図版27～29・32・35)

当住居址の出土遺物としては、土師器の坏形土器と高台付坏・甕形土器、砥石が得られている。㉔～㉖は床面から、㉗・㉘はカマドから、㉙～㉚は埋土から出土している。

坏形土器は全てロクロ使用で、黒色処理は施されていない。底部切り離し技法は回転糸切り、無調整のBⅡa類である。㉔・㉕・㉖の体部外面には細い溝が底部から口縁部に向かってらせん状に巡らされている。㉗の内外面および、㉘の外面には黒斑が認められる。

高台付坏は黒色処理の施されていないBⅡ類の㉙が得られている。台部は破損し、一部しか残存していない。坏部に台部を貼り付けた後、底部をへら状工具で削って調整し、ロクロを使用して仕上げたようである。そのため、坏部の底部切り離し技法は不明である。体部外面には、細い溝が底部から口縁部に向かってらせん状に巡っている。

甕形土器はロクロ使用のものと同くロクロ不使用のものがある。ロクロ不使用のものは、器高が20cm以上のAⅠ類(㉛・㉜・㉝・㉞・㉟)と器高10cm～20cmのAⅡ類(㊱・㊲・㊳・㊴・㊵・㊶・㊷・㊸・㊹・㊺)があり、器高10cm未満のAⅢ類(㊻・㊼)がある。ロクロ使用の甕形土器もBⅠ類の㉟とBⅢ類の㊿がある。㉛・㉜の内外面と㉝・㉞の内面には黒色処理が施されている。㉟・㊱・㊲・㊳の内外には黒斑が認められる。また、㊴・㊵・㊶・㊷・㊸の外面には粘土状のものがナデ付けられたように付着している。

砥石(㊿)は四面とも使い込まれ中央付近が凹んでいる。石質は凝灰岩と鑑定された。

CⅡ-1住居址

【遺構】(図版15、写真図版12)

当住居址はCⅠ-1住居址の南側、CⅠ-2住居址の東側に位置している。平面形はほぼ隅丸長方形を呈している。床面での規模は東西方向に190cm、南北方向に200cmを測る。埋土は全体的に黒褐色土により構成され、十和田a降下火山灰が含まれている。埋土はさらに細分され、中位付近には、焼土を主とする暗赤褐色土で構成されるc層が認められる。c層の平面的

な広がり、90cm×60cmの楕円形状を呈し、厚さは5cm位である。c層の下位の埋土は柔らかく、しまりはない。c層自体も上下の土層と同様に壁上縁付近から床面中央部に向かって流れ込んだような堆積をしている。

床面はほぼ平坦で、比較的堅くしまっている。遺構内から柱穴は検出されていない。遺構外の北東側を除く壁上縁際には、直径10cm～20cm、深さ3cm～7cmの小ピットが13個検出されている。これらの小ピットが柱穴になるかどうかは不明である。壁は床面に対して東側で73度、南側で64度、西側で65度、北側で72度の角度を示す。床面から検出面までの高さは、東側で40cm、南側で50cm、西側で46cm、北側で33cmである。周溝は検出されていない。

【遺物】(図版44、写真図版29)

出土遺物としては床面から環1点(㊸)と埋土上位から土師器片が得られている。㊸は、ロクロ使用の環で、内外全面にいいなミガキの再調整が施され、内外面とも黒色処理が行なわれている。

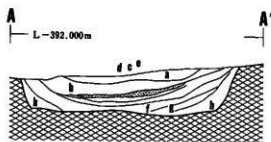
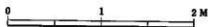
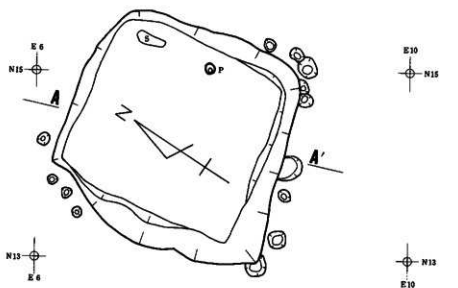
D I - 1 住居址

【遺構】(図版16～18、写真図版13)

当住居址はD I区とD II区の境界線上、C I - 2住居址の西側に位置している。遺構のすぐ西側には農道が通っている。遺構の南側には長芋耕作による攪乱が多く認められる。平面形は南側の方が僅かに広い隅丸長方形を呈している。床面での規模は、東西方向に370cm、南北方向に330cmを測る。埋土は4層に大別され、上位のa・b層は主に黒褐色土、下位のc・d層は主に暗褐色土により構成されている。壁上縁付近から床面中央付近まで続くc・d層には十和田a降下火山灰がブロック状に散在して含まれている。床面直上にある十和田a降下火山灰は火熱を受けて赤色に変化している。床面直上には焼土と炭化材が検出された。炭化材の方向は、カマドの焚口付近に向いているものが多い。これらの状況から当住居址は焼失したものと考えられる。炭化材の横断面形は、円形ないしは楕円形を呈し、直径10cm～15cmを測る。炭化材の樹種はケヤキと鑑定された。

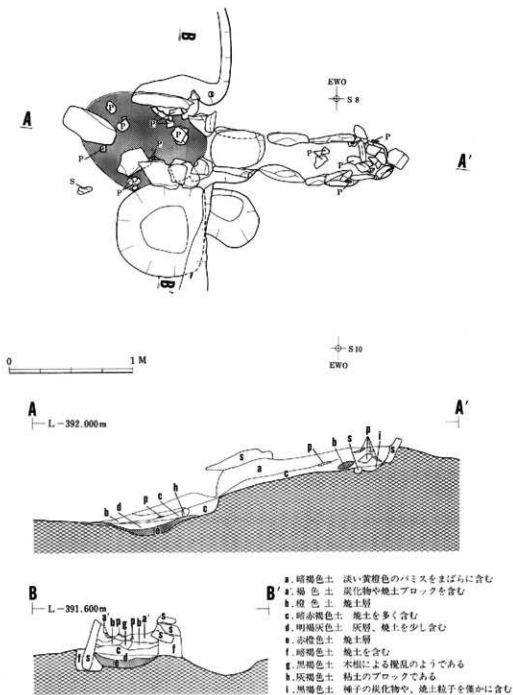
床面はほぼ平坦で、堅くしまっている。中央部付近を除き貼り床となっている。厚さは5cm～20cmである。貼り床はにふい暗褐色土で構成され、貼床上面付近には十和田a降下火山灰が小ブロック状に含まれている。壁は床面に対し、東側で51度、南側で72度、西側で57度、北側で59度の角度を示す。床面から検出面までの高さは東側で25cm、南側で40cm、西側で35cm、北側で25cmである。周溝と柱穴は検出されていない。

カマドは、南側壁の中心から82cm東寄りに構築されている。煙道の方向は南側壁に垂直な線より僅かに東に偏り、N - 6° - Wを示す。煙道の傾斜は約13度の上り勾配で、長さは135cm

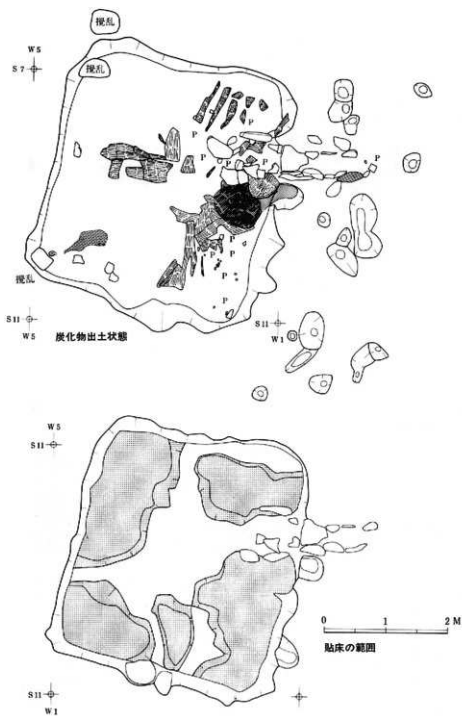


- a. 黒褐色土
- b. 黒褐色土 淡い褐色のノミスをまばらに含む
- c. 暗赤褐色土 焼土層
- d. 黒褐色土 bと類似するがノミスの量が少し多い
- e. 暗褐色土 炭化物と褐色土を含む
- f. 暗褐色土 十和田a降下火山灰を含む
- g. 黒褐色土 fと類似するが少し黒みがかった
- h. 暗褐色土 褐色土を含む

図版15 CII-1住居址 平面図・埋土断面図



図版17 D I-1 住居址 カマド平面図、断面図



図版18 D I-1 住居址 炭化物出土状態・貼床の範囲

である。両袖の間隔は50cm、煙道の幅は燃焼部から煙出し部まで30cm位で並行に続く。袖部は床面を少し掘り下げて、粒径50cm×40cm×10cm位の板状の礫を立て、その両側に土師器片や粘土を貼りつけて作られている。両袖の上に渡されていたと思われる粒径50cm×30cm×20cmの礫が焚口部の手前に置かれていた。燃焼部は床面より低く凹み、焼土が形成されている。焼土の広がり100cm×80cmの楕円形を呈し、厚さは7cmである。煙道部は掘り込み式で、両側に袖部同様の板状の礫を立て並らべ、上にも板状の礫を渡し、シルトで隙間を充填して作られている。上に渡してある礫は、畑地の耕作時に取り除かれたものもあるようで、残存するのは1個だけであった。煙出し部には、礫で区画された浅いピットが設けられている。カマドの埋土は、焚口部から煙道部までは連続し、上位は主に暗褐色土、下位は焼土が多量に含まれる暗赤褐色土により構成されている。燃焼部の焼土上には灰が5cmの厚さで堆積している。煙出し部のピットからは、炭化した堅果類が出土した。この堅果類はコナラとミズナラと鑑定された。

カマドの西側に接して浅いピットが設けられている。平面形は不整楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。規模は開口部径75cm×65cm、底部径40cm×30cm、深さは床面から18cmである。埋土は焼土・炭化物を含む暗赤褐色土により構成され、底部付近からブロック状を呈する十和田a降下火山灰が検出されている。このピットの埋土中から土師器片が得られている。

【遺物】(図版45・46、写真図版29・33・34)

当住居址の出土遺物としては、床面から坏形土器、カマドから坏形土器、甕形土器、手捏ね土器、埋土から甕形土器、須恵器片、鉄滓等が得られている。

坏形土器は全てロクロ使用のもので、底部切り離し技法は回転糸切り、無調整である。内面にミガキ調整と黒色処理の施されたB I a 類の⑪と、黒色処理の行なわれていないB II a 類の⑫、⑬がある。

甕形土器はロクロ不使用で器高が20cm以上のA I 類(⑭・⑮・⑯・⑰・⑱)とロクロ使用で器高が20cm以上のB I 類⑲、器高10cm～20cmのB II 類⑳がある。㉑は輪積みあるいは巻き上げ成形後にロクロ調整を行なったもので、外面の一部に粘土紐の積み上げ痕が残っている。口頸部の下位にはへら状の工具でナデつけたような痕が4条認められる。⑲・⑳は外面に粘土状のものが塗り付けられたように付着している。㉑・㉒の口頸部には幅5mm、深さ1mmの溝が一条巡っており、小さな段が形成されている。

手捏ね土器㉓はほぼ完形品で、カマドの袖際から出土している。ぐいのみ茶碗風の形状を呈し、外面にはへらケズリによる調整が行なわれている。

須恵器片㉔は壺の破片と思われる。外面には並行叩き目文が認められる。内面にも並行叩き目文がかすかに見られるが、ナデ調整が施されており、叩き目は明瞭でない。

鉄滓は海綿状を呈しており、一部に1mm位の鉄分の層が挟まっている。重量は12.2gである。

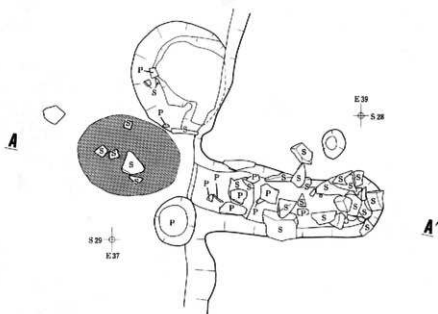
DⅢ-1 住居址

【遺構】(図版19・20、写真図版14)

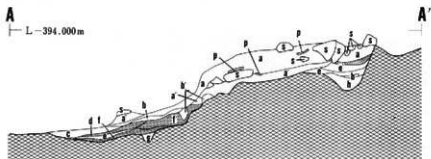
当住居址はDⅡ区とDⅢ区の境界線付近、農道の西側に隣接して検出された。平面形は不整な長方形を呈している。南西壁付近は木根による攪乱を受けている。床面での規模は、東西方向に506cm、南北方向に450cmを測る。上位のa層は耕作土付近から連続する黒褐色土、中位から下位にかけてのb・c・d層は主に暗褐色土により構成されている。b層には十和田a降下火山灰がブロック状に含まれている。d層の床面直上付近にも十和田a降下火山灰のブロックが含まれている。

床面はほぼ平坦で、比較的柔らかい。床面の西側は貼床となっている。貼床にはふい暗褐色土により構成されており、厚さは10cm～20cmである。柱穴は遺構内に4本検出されている。そのうちの2本は北壁の両端から、ほぼ対角線上を165cmずつ住居址の中心に寄った位置に、残りの2本は南壁の両端から南壁際に沿って120cmずつ中央寄りに位置して設けられている。各柱穴の開口部径と床面からの深さは次のようになる。P₁(30cm、38cm)、P₂(35cm、40cm)、P₃(40cm、65cm)、P₄(60cm、58cm)、柱穴の埋土は主に黒色土と褐色土の混合層で構成され上位ほど堅くしまっている。下位は柔らかく、水の湧出する所もある。P₁とP₃では柱の据え方が認められ、据え方の幅はどちらも15cm位である。また、遺構外の南側壁から30cm～110cm離れた位置に柱穴状のピットが3基検出されている(P₅、P₆、P₇)。この3基のピットは、P₄を頂点とし、P₅～P₇を底辺とする二等辺三角形形状の配置を示す。この二等辺三角形の底辺は住居址の南壁にはほぼ並行である。各ピットの開口部径と検出面からの深さは次のようになる。P₅(35cm、55cm)、P₆(30cm、60cm)、P₇(20cm、50cm)。ピットの埋土は主に暗褐色土と褐色土の混合層で構成され、P₅とP₇の底部付近からは十和田a降下火山灰が5cm位の厚さで堆積して検出された。柱の据え方については不明である。住居址の壁は床面に対して50～70度の角度を示し、床面から検出面までの高さは東側で45cm、南側で52cm、西側で35cm、北側で20cmを測る。

カマドは南壁の中心より72cm西側に寄った位置に構築されている。焚口部付近は破損を受けた状態で検出され、袖もほとんど残っていない。東側の袖の壁際には、粒径22cm×20cm×5cmの板状の礫が床を8cm位掘り込んで立てられていた。燃焼部は床面より低く凹んでおり、焼土が形成されている。焼土の広がり83cm×63cmの楕円形を呈し、厚さは5cmを測る。煙道の方角は、南側壁に垂直な線より僅かに東に寄っており、N-12°-Wを示す。傾斜は約28度の上り勾配で30cm続いたのち、約10度の上り勾配となる。煙道の全長は140cmである。煙道の幅は30cm位で、ほぼ並行に続き煙出し部付近で僅かに狭くなる。煙道は掘り込み式で、板状の礫を2



- a. 黄褐色土 小層の褐色土、十和田湖降下火山灰を含む
- a'. 暗褐色土 a に黒褐色土が混じり、全体として暗くなる
- b. 黄褐色土 粘土
- b'. 黄褐色土 b が熱で赤変したもので、淡い黄褐色のパミスを含む
- c. 灰褐色土 黒いスス状のものと焼土を含む
- d. 橙 色 土 焼土層
- e. 黒褐色土 スス状の炭化物と焼土を含む
- e'. 黒褐色土 褐色の焼土を粒状に含む、e より少々赤っぽくなる
- f. 赤褐色土 焼土（地山の焼けたもの）
- f'. 赤褐色土 スス状の炭化物、灰白色の粘土、焼土の混合層
- g. 暗褐色土 石の抜けたところに入ったようである
- h. 暗赤褐色土 焼土の粗粒や炭化物を含む、炭化種子が出土



図版20 DIII-1 住居址 カマド平面図、断面図

列に立て並らべ、上に板状の礫や土師器片を渡し、シルトで隙間を充填して作られている。煙出し部には、深さ12cmの槽鉢状のピットが設けられている。カマドの埋土は、焚口部から煙道部までは連続している。埋土の上位は、カマドの構築に用いられたと思われる黄褐色土で構成され、少量の十和田a降下火山灰が含まれている。下位は主に暗褐色土で構成されている。燃焼部の焼土の上には灰の層が4cmほど堆積している。煙出し部のピットからは堅果類の炭化物が得られている。この堅果類はコナラとミズナラと鑑定された。

遺構内には柱穴以外に3基のピットが検出されている。カマドの東側には浅いピットが設けられている。このピットの平面形は不整形円形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。規模は開口部径65cm、底部径55cm、深さは床面から15cmである。埋土は主に暗褐色土により構成され、焼土と炭化物が含まれ、土師器片が得られている。遺構中央部の南東寄りには不整形円形の浅いピットが設けられている。このピットの規模は、開口部径100cm×80cm、底部径90cm×70cm、深さは床面から5cmである。埋土は住居址の埋土と連続する暗褐色土により構成されている。埋土中から土師器片が得られている。住居址の南東隅には不整形のピットが設けられている。このピットの規模は1辺120cm、壁は直立し、底面まで20cmを測る。埋土は主に黒色土と黒褐色土の混合層で構成され、粘土がブロック状に含まれている。床面と同レベルの埋土上には灰黄色の粘土ブロックが最大厚13cmで堆積していた。

【遺物】(図版47～49、写真図版30・31・33)

当住居址の出土遺物は土師器の環形土器と甕形土器、鉢形土器が得られている。⑫・⑬は床面から、⑭～⑱・㉑～㉒はカマド、㉓は埋土から出土している。

環形土器は全てロクロ使用で、底部切り離し技法は回転糸切り、無調整である。黒色処理の施されているBⅠa類の⑭・⑮と黒色処理の施されていないBⅡa類の⑯～㉒・㉓がある。⑭・⑮の内面には黒色の油脂状のものが付着しており、外面には黒斑が認められる。⑯の外面には細い溝が体部下半から口縁部に向かってラセン状に巡って施されている。外面には黒色の油脂状のものが付着している。㉓の外面にはミガキ調整が施されている。

甕形土器は全てロクロ不使用で、器高20cm以上のAⅠ類に属している。⑰・⑱・㉔の内外面には粘土紐の積み上げ痕が残っている。⑰・⑱の外面には粘土状のものが塗り付けられたように付着している。㉓と㉔の内外面には炭化物が付着している。

鉢形土器(㉕)は⑱と同形態の土器の破片の一部と思われる。内面には粘土紐の積み上げ痕が残り、内面の体部下半にはナデツケのような調整痕が認められる。外面には粘土状のものが塗り付けられたように付着している。

E II-1 住居址

【遺構】(図版21、写真図版15)

当住居址はD III-1住居址の西側に位置している。遺構の北側は開田工事による削剝を受け、南側の壁と床の一部しか残存していない。残存部から推測すると、遺構の平面形は隅丸の四辺形を呈するようである。南側の床面での規模は、東西方向に350cm前後を測る。埋土は暗褐色土の単層により構成され、床面近くには焼土が多く含まれる。床面はほぼ平坦で、ほとんどしまりはなく、柱穴は検出されていない。南側の壁は床面に対して65度の角度を示し、床面から検出面までの高さは25cmを測る。カマドは検出されていない。

遺構内には焼土のつまったピットが2基検出されている。南側壁のほぼ中央部には、平面形がほぼ円形のピットが構築されている。このピットの壁は65度~70度の勾配で南側に傾斜して下がり、底部は開口部よりも南側に入りこんでいる。規模は開口部径75cm、底部径65cm×75cm、深さは住居址床面から25cm~35cmである。ピットの埋土は主に炭化物を含む焼土からなり、上位の焼土は住居址の床面から連続して堆積する。また、上記のピットの東側に隣接した位置に時計皿状のピットが設けられており、このピットの規模は、開口部径55cm×45cm、深さは住居址床面から10cmである。埋土は主に焼土により構成され、炭化物、礫が含まれる。埋土から土師器片が得られている。

この遺構は、検出時に壁の輪郭がはっきりしていたので住居址ということにしてある。しかし、床面がしまっておらず、壁も明瞭でない。他の住居址では南側壁にカマドが構築されているが、当住居址は南側壁付近が残存しているにもかかわらずカマドが検出されていない。

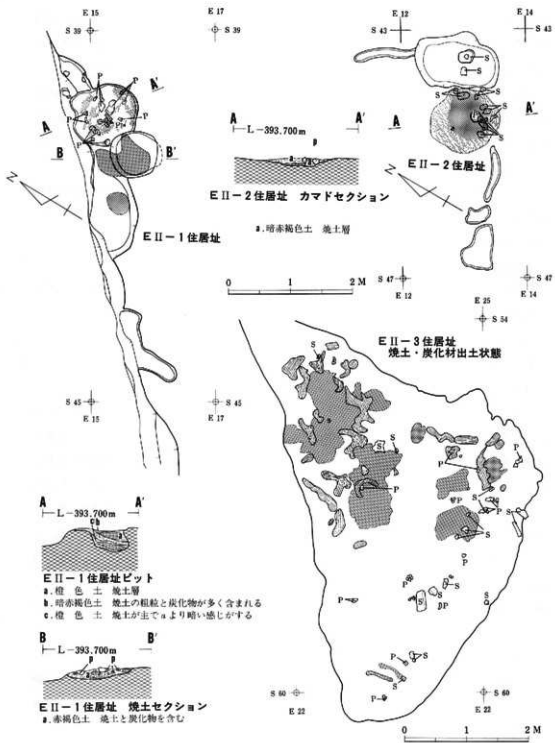
【遺物】(図版49・50、写真図版31)

当住居址の出土遺物としては土師器の甕形土器が得られている(㉔~㉖)。ロクロ使用のものとロクロ不使用のものがある。ロクロ使用の㉔は器高20cm以上のB I類に属すると思われる。内面の一部には炭化物が付着しており、外面には黒斑が認められる。ロクロ不使用の甕形土器は器高10cm~20cmのA II類に属すると思われる。㉕は内外面に粘土紐の積み上げ痕が残っている。㉖の外面は粘土状のものが付着している。内面には黒斑が認められる。㉔は口径が器高を僅かに上まわっており、深鉢形を呈している。内外面には粘土紐の積み上げ痕が認められる。㉕の外面には粗いナデ調整が施されている。

E II-2 住居址

【遺構】(図版21、写真図版15)

当住居址はE II-1住居址のすぐ西側に位置している。開田工事による削剝を受け、遺構の大半が破壊されている。僅かに周溝の一部とカマドの燃焼部等が残存している。残存する周溝から推測すると、平面形は四角形を呈しているようである。規模は不明である。周溝の埋土は



図版21 E II-1 住居址 E II-2 住居址 E II-3 住居址

炭化物や十和田 a 降下火山灰を含む暗褐色土により構成されている。床面と思われる所には開田の際の重機のキャタピラの痕が残っている。柱穴は検出されていない。東側および南側に残存する周溝の幅は開口部で10cm～15cm、底部で5cm～8cm、深さは検出面から5cmを測る。

カマドは南壁の東寄り付近に構築されている。燃焼部には焼土が形成されており、焼土の広がり直径100cm位の不整形を呈し、中央部付近の厚さは10cm位である。焼土の中央部付近には、口縁部から体部上半にかけての小型甕の一部が埋設されていた。この甕はカマドの支脚として設置されたことも考えられるが詳細は不明である。

カマドに隣接して東側の隅に、隅丸長方形のピットが設けられている。規模は開口部で140cm×70cm、底部で130cm×60cm、深さは検出面から20cm位である。ピットの埋土は炭化物が含まれる暗褐色土の単層で構成されている。埋土中からは土師器片が得られている。

【遺物】(図版50、写真図版31)

焼土中から出土した変形土器(⑩)は、ロクロ不使用で、器高が10cm～20cmのAⅡ類に属すると考えられる。土器は火熱を受け、僅かに橙色を呈している。

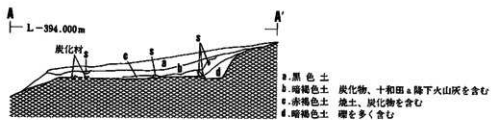
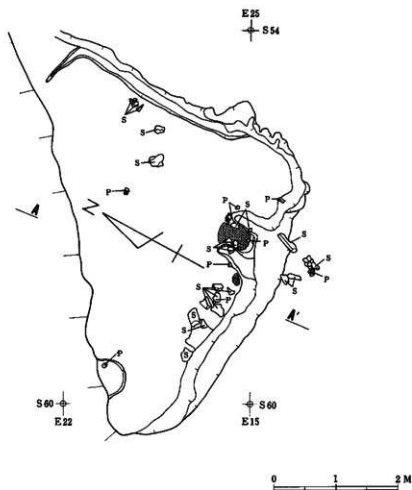
EⅡ-3 住居址

【遺構】(図版21～23、写真図版16)

当住居址はEⅡ-1住居址、EⅡ-2住居址の南西に位置している。この住居址も開田工事による削削を受け、南側半分ぐらゐまでしか残存していない。残存部から推測すると、平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。床面での規模は東西方向470cm、南北方向400cm位と考えられる。埋土は4層に大別される。上位のa層は耕作土から連続する黒褐色土、中位のb層は十和田 a 降下火山灰を含む暗褐色土、下位のc・d層は主に暗赤褐色土により構成され、焼土・炭化材・礫が多く含まれる。当住居址は焼失を受けており、炭化材が多く検出されている。しかし、炭化材の方向は不規則で、上層構造を想定することはできない。炭化材の横断面形は円形ないしは楕円形を呈し、直径10cm～15cmを測るものが多い。樹種はカツラおよびケヤキの2種類が鑑定されている。周溝の埋土は十和田 a 降下火山灰が含まれる暗褐色土で構成されている。

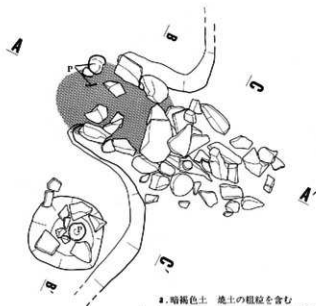
床面はほぼ平場で、堅くしまっている。南側の壁際には礫層が露出している。柱穴は検出されていない。壁は床面に対して、東側で78度、南側で60度の角度を呈している。床面から検出面までの高さは、東側で30cm、南側で50cmである。東壁際には周溝が設けられている。周溝の幅は開口部で10cm～20cm、底部で5cm～15cm、深さは住居址床面から10cmである。

カマドは南壁の中央から150cm東に寄った位置に構築されている。袖は径23cm×20cm×10cm位の礫を芯として使用し、底部は床面を少し掘り込んで立て、小礫や土師器片・粘土を周



図版22 E II-3住居址 平面図、埋土断面図

E 25
S 56

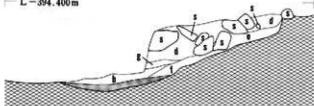


0 1 M

E 25
S 56

- a. 暗褐色土 焼土の粗粒を含む
- b. 橙色土 焼土、灰、炭化物を含む
- c. 黄褐色土 粘土層
- d. 暗褐色土 僅かに焼土を含む
- e. 暗褐色土 礫が混じり、地山の土に類似している
- f. 暗赤褐色土 焼土の粗粒と、粘土の小ブロックを含む

A
L-394.400m



- g. 灰赤褐色土 焼土と灰、炭化物を含む
- h. 橙色土 焼土層
- i. 暗褐色土 炭化物、焼土、小礫を含む

B
L-394.100m



B'

C
L-394.400m



C'

図版23 E II-3 住居址 カマド平面図、断面図

面に貼りつけて作られ、両袖の上には粒径45cm×25cm×10cmの板状の礫が渡されている。礫と礫の間隙はシルトで充填されている。燃焼部は床面より僅かに低くなり、焼土が形成されている。焼土の広がりは97cm×65cmの楕円形を呈し、厚さは7cmを測る。煙道の方向は南壁にほぼ垂直でN-6°-Wを示す。傾斜は20度の上り勾配で、長さは80cmである。両袖の間隔は65cm、煙道の幅は燃焼部側で50cm、煙出し部側で35cmを測り、燃焼部から煙出し部に向かって狭くなる形状を呈している。カマドの埋土は燃焼部から煙道部まで連続しており、主に炭化物を含む焼土により構成されている。袖や煙道に立て並べられている礫は底部の形状により下位の土層を掘り込む深さが異っている。礫の底部が平坦で安定したものは下位の土層の掘り込み部が浅く、底部が尖っていたり、まるみがかかったりして安定の悪い礫は下位の土層が深く掘り込まれている。カマドに使用されている礫はほとんど安山岩系である。

カマドの西側の壁際には小ピットが設けられている。ピットの平面形は不整形を呈し、壁は外傾して立ち上がっている。規模は開口部径60cm、底部径35cm、深さは住居址床面から10cmを測る。埋土は暗褐色土で構成され、炭化物・焼土・小礫が含まれている。埋土上位の床面と同レベルの所には、土師器環(⑩)が置かれ、環の周囲には粒径10cm~15cmの礫が並べられている。上記ピットの西側の壁際には、粒径42cm×35cm×12cmの板状の礫が立てかけられている。礫の下位からは焼土の薄い層が認められた。

【遺物】(図版50・51、写真図版32)

当住居址の出土遺物としては、土師器の環形土器、甕形土器、手捏ね土器、須恵器片、砥石等が得られている。④~⑥は床面から、⑦はカマドから、⑧は埋土から出土している。

環形土器(④・⑤)はロクロ使用でBⅡa類に属している。④の外面には体部下半から口縁部付近に向かって細い溝がラセン状に巡っている。

甕形土器はいずれも器高が20cm以上あると思われ、ロクロ使用のBⅠ類の⑨と、ロクロ不使用のAⅠ類の⑩がある。⑩の内面には、ロクロ調整後に再調整したようなナデ痕が認められる。⑩の底部は僅かに上げ底ぎみになっており、木葉痕が認められる。外面の底部付近には炭化物が付着している。

手捏土器(⑧)は口縁部付近を欠損している。外面にはヘラナデのような調整痕がある。

須恵器(⑨)は壺あるいは甕の破片の一部と思われる。外面に平行叩き目文が施されている。内面はナデ調整が行なわれている。

砥石(⑪)は使用面が5面あり、5面ともよく使い込まれていて、中央部付近と思われる所から破損している。石質は石英安山岩と鑑定された。

2. ピット

A II-51ピット (図版24、写真図版17)

当ピットはA I-1住居址の東側、見岳川に侵食されて形成された崖際に位置している。平面形は開口部・頸部ともにほぼ円形を、底部は不整形円形を呈している。断面形はフラスコ形を呈している。底面はほぼ平坦である。規模は開口部径 115 ± 5 cm、頸部径 105 ± 5 cm、底部径 155 cm \times 125 cm、深さは検出面から 70 cm \sim 73 cmである。埋土は主に暗褐色土により構成され、上位のa層には焼土や炭化物が含まれている。中位のb層には褐色土ブロックが含まれ、下位のc層はほとんど含有物はないようである。出土遺物は得られていない。

C I-51ピット (図版24、写真図版17)

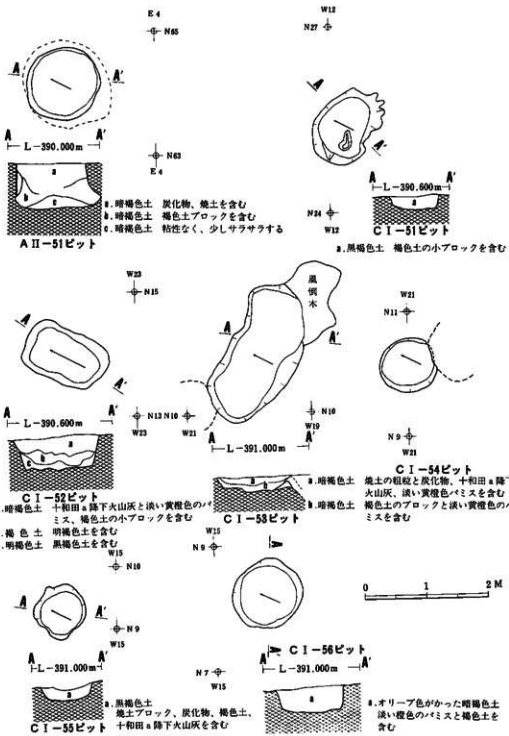
当ピットはC I区の東端付近に位置している。一部に木根による擾乱を受けており、開口部・底部ともに不整形円形を呈する。壁はほぼ直立する。底面は中央部付近が僅かに凹む鍋底状を呈している。規模は開口部径 (120 ± 5) cm \times (90 ± 5) cm、底部径 95 cm \times (75 ± 5) cm、検出面からの深さは 15 cm \sim 23 cmである。埋土は褐色土の小ブロックを含む黒褐色土の単層である。出土遺物は得られていない。

C I-52ピット (図版24、写真図版17)

当ピットはC I区の北側に位置している。平面形は開口部・底部ともに不整な隅丸長方形を呈している。壁は底面に対し 60 度 \sim 85 度の角度を呈し、外傾して立ち上がる。底面は北側で僅かに起伏するが、他は平坦である。規模は開口部で (120 \sim 135) cm \times (75 \sim 80) cm、底部で (105 \sim 110) cm \times (60 \sim 65) cm、検出面からの深さは 50 cm位である。埋土は3層に大別される。上層は主に暗褐色土で構成され、十和田a降下火山灰や淡い黄褐色のバミス、褐色土の小ブロックが含まれている。中層は褐色土、下層は明褐色土で構成されている。出土遺物として、埋土の上層から土師器片が得られている。

C I-53ピット (図版24・51、写真図版18)

当ピットはC I-3住居址の東側に位置している。北西側でC I-54ピットを切って構築されている。東側は風倒木による擾乱を受け、形状の詳細は不明である。残存部から推測すると平面形は開口部・底部ともに不整な隅丸長方形を呈するようである。壁は底面に対して 55 度 \sim 60 度の角度を呈し、外傾して立ち上がっている。底面の一部に小さな段差があるが、他はほぼ平坦である。規模は開口部で 230 cm \times (110 ± 5) cm、底部で 215 cm \times (80 ± 10) cm、検



図版24 A II-51ピット、C I-51ピット、C I-52ピット、C I-53ピット、C I-54ピット、C I-55ピット、C I-56ピット

出面からの深さは北側で16cm、南側で25cmを測る。埋土は主に暗褐色土で構成され、2層に細分される。上層には焼土の粗粒や炭化物、十和田 a 降下火山灰が含まれている。下層には褐色土のブロックと淡い橙色のバミスが含まれている。出土遺物は、埋土より土師器片と須恵器片が得られている。

出土した須恵器片 (㊸) はツボの破片と思われる。内外面にロクロ使用の痕跡がみられる。

C I-54ピット (図版24)

当ピットはC I-53ピットに南東側の一部を切られている。平面形は開口部・底部ともにほぼ楕円形を呈し、壁はほぼ直立する。底面は平坦で、北側から南側に向かって緩く傾斜し下がっている。規模は開口部径(95±α)cm×85cm、底部径(85±α)cm×70cm、検出面からの深さは北側で7cm、南側で15cmである。埋土は主に、にぶい褐色土により構成され、褐色土の小ブロックと炭化物が含まれている。出土遺物は得られていない。

C I-55ピット (図版24、写真図版18)

当ピットはC I-102焼土遺構とC I-56ピットの中間に位置している。平面形は開口部・底部ともに不整形円形を呈している。壁は水平面に対して75度～80度の角度を呈し、外傾して立ち上がる。底面は凹凸が激しく、しまりはない。規模は開口部径80±10cm、底部径65±5cm、検出面からの深さは20cm～25cmである。埋土は主に黒褐色土により構成され、焼土ブロックや炭化物、十和田 a 降下火山灰を含む。出土遺物は得られていない。

C I-56ピット (図版24、写真図版18)

当ピットはC I-55ピットのすぐ南側に位置している。平面形は開口部・底部ともにほぼ円形を呈し、壁はほぼ直立する。底面は僅かに起伏している。規模は開口部径115cm、底部径95cm、検出面からの深さは35cm～40cmである。埋土は主にオリープ色がかった暗褐色土の単層で構成され、淡い橙色のバミスや褐色土のブロックが含まれている。出土遺物は得られていない。

C I-57ピット (図版25)

当ピットはC I-102焼土遺構とC I-58ピットの中間に位置しており、両遺構によって切られている。平面形は開口部・底部ともに不整形円形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模は開口部径70cm×42cm、底部径50cm×28cm、検出面からの深さは16cmを測る。埋土は褐色土の小ブロックを含む暗褐色土の単層で構成されている。出土遺物は得られていない。

C I-58ピット (図版25、写真図版19)

当ピットはC I-3住居址の南側に位置し、C I-57ピットを切って構築されている。開口部付近は掘り過ぎや崩落により破壊を受けているが、不整ながらも開口部・底部ともにほぼ隅丸長方形を呈している。壁はほぼ直立する。底面は平坦でしまっている。規模は開口部で160cm×75cm、底部で115cm×65cm、検出面からの深さは40cmである。埋土は主に暗褐色土により構成され、十和田 a 降下火山灰と褐色土の粗粒が含まれている。出土遺物としては遺構検出面付近から土師器片が得られている。

C I-59ピット (図版25、写真図版19)

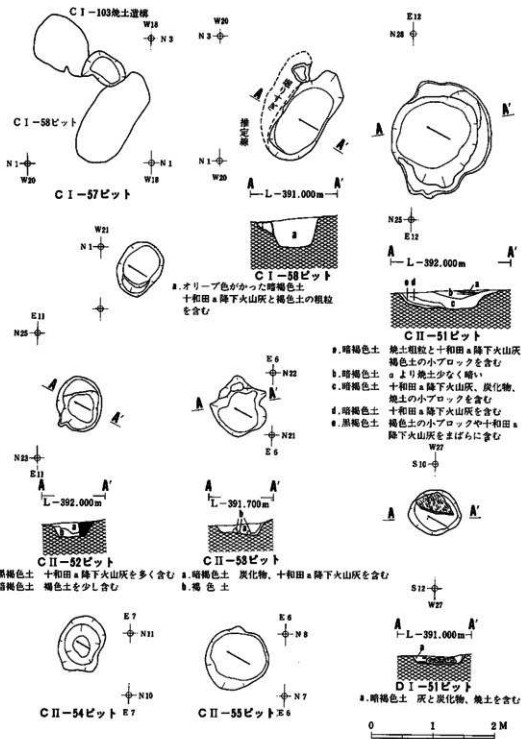
当ピットはC I-3住居址とC I-58ピットの間中に位置している。西側の一部は木根による攪乱を受けている。平面形は開口部・底部ともにほぼ楕円形を呈している。壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模は開口部径85cm×65cm、底部径60cm×50cm、検出面からの深さは20cmである。埋土は主に暗褐色土で構成され、淡い橙色のバミスと褐色土のブロックが含まれている。出土遺物は得られていない。

C II-51ピット (図版25、写真図版19)

当ピットはC II区の東端に位置している。一部に木根による攪乱を受けており、平面形は開口部・底部ともに不整楕円形を呈している。壁は底面に対して120度～135度の角度を呈し、外傾して立ち上がっている。底面には小さな起伏が認められる。規模は開口部径(190±3)cm×160cm、底部径(120±3)cm×115cm、検出面からの深さは20cm～30cmを測る。埋土は全体として十和田 a 降下火山灰を含む暗褐色土で構成されている。出土遺物は埋土の上層より土師器片が得られている。

C II-52ピット (図版25、写真図版20)

当ピットはC II-51ピットの西側に位置している。平面形は開口部がほぼ楕円形、底部は不整な楕円形を呈している。壁は底面に対して120度位の角度を呈し、外傾して立ち上がる。底面は北東側が小さな段になり、他はほぼ平坦である。規模は開口部径90cm×73cm、底部径49cm×41cm、検出面からの深さは20～23cmである。埋土は2層に大別され、上層は十和田 a 降下火山灰を多く含む黒褐色土、下層は主に暗褐色土により構成されている。出土遺物としては、埋土上位から、土師器片が得られている。



図版25 C I 57 ビット、C I 58 ビット、C I 59 ビット、C II-51 ビット、C II-52 ビット
C II-53 ビット、C II-54 ビット、C II-55 ビット、D I-51 ビット

C II-53ピット (図版25)

当ピットはC I-1住居址とC II-52ピットの中間に位置している。木根による擾乱を受けており、開口部・底部ともに不整楕円形を呈している。壁は底面に対して45度～80度の角度を呈し、外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、北から南に向かって僅かに傾斜して下がっている。規模は開口部径95cm×85cm、底部径70cm×65cm、検出面からの深さは北側で10cm、南側で20cmを測る。埋土は炭化物や十和田a降下火山灰を含む暗褐色土で構成されている。底部付近には褐色土のブロックが見られる。出土遺物としては、埋土中より土師器片が多く得られている。

C II-54ピット (図版25、写真図版20)

当ピットはC I-2住居址の南側、C II-55ピットの東側に位置している。平面形は開口部底部ともに不整楕円形を呈し、壁は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模は開口部径(90±5)cm×(65±3)cm、底部径65cm×55cm、検出面からの深さは25cmである。埋土は主に黒褐色土の単層で構成され、淡い橙色で粒径5mm～15mmのバミスと褐色土のブロックが含まれている。出土遺物は得られていない。

C II-55ピット (図版25、写真図版20)

当ピットはC I-2住居址の南側、C II-54ピットの西側に位置している。平面形は開口部がほぼ円形、底部がほぼ楕円形を呈している。壁は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。規模は開口部径(100±5)cm、底部径90cm×75cm、検出面からの深さは25cmである。埋土は主に黒褐色土で構成され、淡い橙色で粒径5mm～10mmのバミスが含まれている。出土遺物としては、埋土から土師器片が得られている。

D I-51ピット (図版25、写真図版20)

当ピットはC I-3住居址の西側に位置している。平面形は開口部・底部ともにほぼ楕円形を呈している。壁は床面に対して55度～60度の角度を示し、外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。規模は開口部径85cm×75cm、底部径70cm×60cm、深さは検出面から10mm～15cmである。ピット内には炭化材がほぼN-S方向に並べられて検出された。ピットの南側半分は精査時の不手際で炭化材を残さずに掘り上げてしまい、図面には東半分の出土状態しか表わされていない。炭化材の周囲の埋土は主に黒褐色土で構成され、灰・焼土・炭化物が含まれている。炭化材の樹種は、ケヤキ、カツラ、タモ類であった。出土遺物としては、ピット検出面の北側付近から土師器片が得られている。

炭化材のC¹⁴年代測定の結果は次の通りである。(測定 日本アイソトープ協会)

N-3671 (D I-51) No.19 1280±75y.B.P. (1240±75y.B.P.)

3. 焼土遺構

C I-101 焼土遺構 (図版26、写真図版20)

当焼土遺構はC I-52ピットの南側に隣接している。このピットとの共存関係は不明である。焼土の広がり是不整形円形を呈している。焼土は現地性のもので、上面は堅くしまっている。焼土の大きさは、102cm×80cm、厚さ8cmである。出土遺物は得られていない。

C I-102 焼土遺構 (図版26、写真図版21)

当焼土遺構はC I-3住居址の東側、C I-53ピットとC I-55ピットの間位置している。焼土は現地性のものであり、広がり200cm×140cmの不整形円形状を呈し、厚さは10cm～20cmである。焼土中には灰や炭化物が含まれ、焼土は堅くしまっている。出土遺物としては、焼土の上位付近から土師器片が多数得られている。

C I-103 焼土遺構 (図版26、写真図版21)

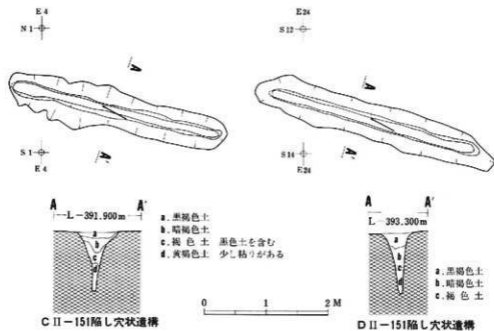
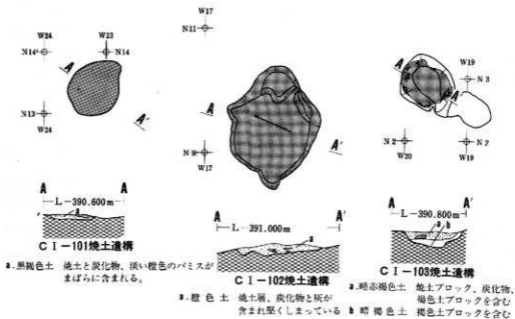
当焼土遺構はC I-3住居址の南側に位置し、C I-57ピットを切って構築されている。平面形は開口部・底部ともに不整形円形を呈している。壁は外傾して立ち上がる。底面は中央部が凹み時計皿状を呈している。規模は開口部径100cm×80cm、底部径60cm×40cm、検出面からの深さは25cmである。埋土は2層に大別され、上層は焼土ブロック、炭化物、褐色土の混合した暗赤褐色土、下層は褐色土ブロックを含む暗褐色土により構成されている。出土遺物は得られていない。

当焼土遺構はピット状を呈しており、焼土ピットと呼ぶ方が適切かもしれない。埋土中の焼土はブロック状を呈し、連続した焼土形成の状態を呈していないので、異地性のもと考えられる。

4. 陥し穴状遺構

C II-151 陥し穴状遺構 (図版26、写真図版21)

当陥し穴状遺構はC I-2住居址とD I-1住居址の間に位置している。標高は392m前後の所で、長軸方向はN-14°-Wを示す。形状は溝状を呈し、横断面形は「Y」字状を呈する。



図版26 CI-101焼土遺構 CI-102焼土遺構 CI-103焼土遺構
 CII-151 陥し穴状遺構 DII-151陥し穴状遺構

底部は礫層に達し、ほぼ平坦である。底部の北端は開口部直下よりも奥に向かって抉り込まれており、幅も少し広くなる。規模は開口部で長さ360cm、幅55cm～80cm、底部で長さ345cm、幅10cm～18cm、検出面からの深さは北側で90cm、南側で100cmである。埋土の上位は黒褐色土、下位は黄褐色土で構成されている。出土遺物は得られていない。

D II-151陥し穴状遺構（図版26、写真図版21）

当陥し穴状遺構はD I-1住居址とD III-1住居址の中間に位置している。標高は393m前後、長軸方向はN-12°-Wを示す。形状は、C II-151陥し穴状遺構と同様に溝状を呈しており、横断面形は「V」字状を呈する。底部は礫層に達しており、南側では礫層が自然隆起した状態になっているため、北側ほどは深く掘り込まれていない。規模は開口部で長さ400cm、幅50cm～60cm、底部で長さ355cm、幅10cm～15cm、検出面からの深さは北側で100cm、南側で110cmを測る。埋土の上位は黒褐色土、下位は褐色土により構成されている。出土遺物は得られていない。

V. 考察とまとめ

1. 遺構

(1) 竪穴住居址

本遺跡で検出された竪穴住居址を表にまとめると次の通りである。

住居址名	形態 (床面上) cm	規模	柱穴	周溝	カマド				出土遺物	備考
					位置	煙道の方向	煙道の勾配	煙道の構築		
A I-1住	長方形	480×520	無	無	南壁東寄り	N-12°-W	上り(13°)	掘込式	土師器・磁石・鉄押	
B II-1住	方形	580×580	有	有	有	N-11°-E	上り(20°)	掘込式 (礎を芯)	土師器・須恵器	
C I-1住	(隅丸) 長方形	405×370	有	有	有	N-50°-W	上り(20°)	掘込式	土師器・須恵器・磁石 木製品・鉄製品・鉄押	大型P有 焼失
C I-2住	方形	340×340	外壁に 有(5)	有	有	N-12°-W	上り(20°)	掘込式	土師器・須恵器・鉄押	
C I-3住	長方形	432×525	有(4)	有	有	N-4°-W	上り(22°)	掘込式 (礎を芯)	土師器・磁石	
C II-1住	(隅丸) 長方形	200×190	無	無	無				土師器	
D I-1住	(隅丸) 長方形	330×370	有	有	南壁東寄り	N-6°-W	上り(13°)	掘込式 (礎を芯)	土師器・須恵器・鉄押	貼り床・ 焼失
D III-1住	長方形	350×506	有(4)	有	南壁西寄り	N-12°-W	上り(26°)	掘込式 (礎を芯)	土師器	貼り床
E II-1住	?	?×350	無	無	?				土師器	開田による 削削
E II-2住	?	?	有	有	南壁東寄り	?	?	?	土師器	有
E II-3住	(隅丸) 長方形	400×470	無	有	有	N-6°-W	上り(20°)	掘込式 (礎を芯)	土師器・須恵器・磁石	有 焼失

この遺跡で調査した住居址は上掲表の通り11棟である。この集落は調査区域外にも広がることも考えられる。昭和55年度調査の屑畑II遺跡は、見岳川(安比川支流)をはさんで当遺跡のすぐ北側にあり、やはりこの時期と思われる住居址を検出している。

これらの住居址は切り合いがなく、検出状況から見てほぼ同一時期と考えられ、この地域に10戸以上の集落を形成していたと思われる。

調査した住居址のカマドはすべて南壁にある。位置は東寄りのもの8、西寄りのもの1である。軸は礎を芯として使用し、シルトや粘土、土器片などでかためている。煙道は長く、上り勾配であり、掘込式で構築している。煙道に礎を使用しているのは5棟、使用していないのは3棟である。

柱穴を検出できたものは2棟で、その配置は類似している。その他住居址の外部に柱穴らしいものを検出できたものが1棟で、他は検出できない。また焼失を受けた住居址が3棟ある。

出土遺物は、各住居址によって特徴はあるものの、基本的には同一類型にあると思う。

各住居址になんらかの形で入り込んでいる十和田 a 降下火山灰のあり方は、時代確定の重要な要素と思われるが、そのことについて次に述べたい。

各住居址の構築された時期

扇畑 I 遺跡から検出された住居址の掘り込み面は耕作土の直下あるいは耕作土中にあつたと思われ、耕作土直下からは十和田 a 降下火山灰が検出されている。住居址の埋土や貼床にも量や形態の違いはあるが十和田 a 降下火山灰が含まれている。これらの十和田 a 降下火山灰はすべて同一時期に降下したものと考えられている。そこで各住居址の埋土等に含まれる火山灰のありかたから各住居址の構築された時期を推定してみた。

各住居址と十和田 a 降下火山灰の関係は次のようであった。（挿図 3 参照）

A I - 1 住居址

- ・遺構外であるが、遺構の掘り込み面付近に十和田 a 降下火山灰層が認められる。
- ・壁上縁から床面直上にかけて推積する埋土の上位に十和田 a 降下火山灰がブロック状に含まれる。
- ・住居址に伴うと考えられる住居内ピットの埋土にも十和田 a 降下火山灰がブロック状に含まれる。このピットの埋土は上記の住居壁際から連続している。

B II - 1 住居址

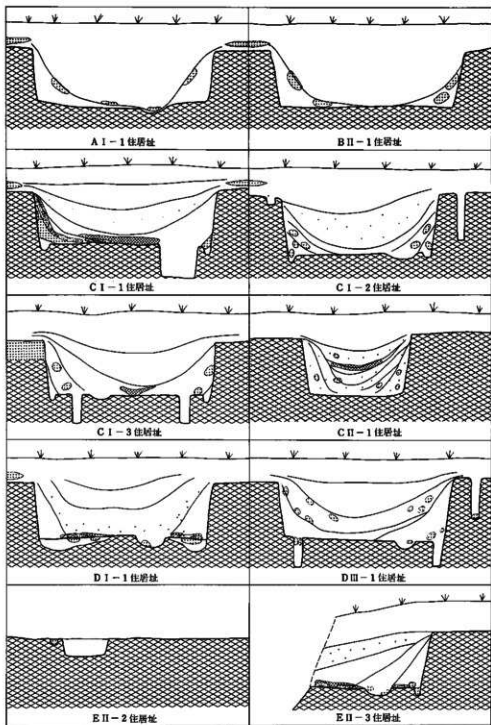
- ・遺構外であるが遺構の掘り込み面付近に十和田 a 降下火山灰層が認められる。
- ・壁上縁から床面まで連続して推積する埋土に十和田 a 降下火山灰がブロック状に含まれる。

C I - 1 住居址




- ・遺構外であるが、掘り込み面付近に連続する層に十和田 a 降下火山灰層が認められる。
- ・壁際の炭化材、焼土の下位から火熱を受け赤変した十和田 a 降下火山灰が多量に認められる。
- ・壁上縁から住居址中央部までレンズ状に推積する埋土中に十和田 a 降下火山灰が小ブロック状に散在して認められる。

C I - 2 住居址

- ・遺構外であるが、遺構の掘り込み面付近に十和田 a 降下火山灰層が認められる。
- ・壁上縁から床面まで連続して推積する埋土に十和田 a 降下火山灰がブロック状に含まれる。
- ・周溝の埋土中に十和田 a 降下火山灰がブロック状に混入する。
- ・壁上縁から住居址中央付近に向かってレンズ状に推積する埋土中に十和田 a 降下火山灰が小ブロック状に散在して含まれている。



挿図 3 住居址と十和田 a 降下火山灰の関係

 十和田 a 降下火山灰
 炭化材
 地土

C I - 3 住居址

- 住居址は風倒木痕に推積した十和田 a 降下火山灰を切って構築している。
- 壁上縁から床面まで連続して推積する埋土中に十和田 a 降下火山灰がブロック状に推積している。周溝の埋土中には認められない。

C II - 1 住居址

- 埋土全体に十和田 a 降下火山灰がブロック状あるいは小ブロック状、果粒状に含まれる。

D I - 1 住居址

- 貼床上面付近および床直上、ピット底部に十和田 a 降下火山灰がブロック状に含まれる。床直上の火山灰は火熱を受けて赤変している。
- 壁上縁から住居址中央付近までレンズ状に推積する埋土の下位に十和田 a 降下火山灰が小ブロック状あるいは果粒状に散在して含まれている。

D III - 1 住居址

- 柱穴の埋土に十和田 a 降下火山灰が含まれる。
- 壁上縁から床面まで連続して推積する埋土に十和田 a 降下火山灰がブロック状に含まれる。
- 壁上縁から住居址床面中央までレンズ状に推積する埋土に十和田 a 降下火山灰がブロック状に推積している。

E II - 1 住居址

- 埋土中には十和田 a 降下火山灰は認められない。

E II - 2 住居址

- 周溝の埋土に十和田 a 降下火山灰がブロック状に認められる。

E II - 3 住居址

- 周溝およびピットの埋土、床直上に十和田 a 降下火山灰がブロック状に認められる。
- 壁上縁から住居址中央部までレンズ状に推積する埋土に十和田 a 降下火山灰が小ブロック状あるいは果粒状に散在して含まれている。

各住居址と十和田 a 降下火山灰の関係は以上ようになる。これらの十和田 a 降下火山灰のあり方は次の3種類に大別されるようである。

- ①層をなして推積する。
- ②ブロック状に含まれる。
- ③小ブロック状あるいは果粒状に含まれる。

ところで、十和田 a 降下火山灰は自然状態においては風倒木痕や凹地等にレンズ状に推積しているようであり、赤坂田 I、II 遺跡や屑畑 I、II 遺跡においても多くの類例が検出されている。二戸市の長瀬遺跡や上田面遺跡等に見られた十和田 a 降下火山灰降下以前に廃棄された住

居址にレンズ状に推積する十和田 a 降下火山灰もこの自然推積によるものと考えられる。火山灰降下後に構築された遺構にはレンズ状に推積する火山灰は認められていないようである。

十和田 a 降下火山灰は他の火山灰と同様に風や水で容易に崩壊し移動する性質を持っており小ブロック状や果粒状に散在することは自然現象では起こらないと思われる。また、仮に屋根の上に土を被せてあったとすると、屋根の上に降り積った十和田 a 降下火山灰がすべて流されるとはかぎらない。もし凹み等にブロック状に残存していれば屋根の崩壊とともに十和田 a 降下火山灰が崩落し、壁上縁から床面まで三角形状に推積する埋土にブロック状に含まれることが考えられる。

十和田 a 降下火山灰の性質や各住居址との関係を整理してみると次のようになりそうである。

- いずれの住居址も十和田 a 降下火山灰が降下した以後に廃棄された。
- 貼り床や柱穴埋土、馬溝埋土に含まれている火山灰のあり方は、住居址が構築される以前に十和田 a 降下火山灰が降下していたことを示している。
- 壁際の床面に認められ、火熱を受けて赤変している火山灰のあり方は、住居址が焼失を受けた時に屋根の上に降下推積していたことを示している。
- 壁上縁から床面まで連続して推積する埋土にブロック状に含まれる火山灰のあり方は、屋根の上に降り積っていた十和田 a 降下火山灰の一部が流失されずに残り、屋根の崩壊とともに落下し、ブロック状に含まれたことを示している。
- 埋土中に小ブロック状あるいは果粒状に推積するあり方は、自然状態では認められず、人為的な埋土の可能性が考えられる。

以上のことより扇畑 I 遺跡の住居址の構築時期は十和田 a 降下火山灰が降下する以前と以後に分けられ、住居址が廃棄されたのはすべて十和田 a 降下火山灰の降下以後ということが推測される。十和田 a 降下火山灰が降下する以前に構築された住居址は、A I-1 住居址、B II-1 住居址、C I-1 住居址、C I-2 住居址。このうち C I-1 住居址は十和田 a 降下火山灰が降下して早い時期に焼失を受け、他の遺構よりも早く廃棄されたと考えられる。十和田 a 降下火山灰が降下して以後に構築された住居址は、C I-3 住居址、D I-1 住居址、D III-1 住居址、E II-2 住居址、E II-3 住居址、C II-1 住居址で、このうち C II-1 住居址は人為的に埋められた可能性が強いと思われる。他の住居址についても上位の土層で十和田 a 降下火山灰が小ブロック状あるいは果粒状に含まれている所は人為的に埋められたものとも考えられる。

なお十和田 a 降下火山灰の年代は大池昭二氏等により平安中～末期 (B.P.1000年ごろ)とされているが当遺跡の焼失住居から出土した炭化材の¹⁴C年代の測定結果は以下のようになっている。C¹⁴年代測定は社団法人日本アイソトープ協会で行なったものである。

- N-3670 (E II-1) No18 1320±75 y B.P. (1280±75 y B.P.)
 N-3672 (D I-1) No20 1400±85 y B.P. (1360±80 y B.P.)
 N-3675 (C I-1) No23 1240±85 y B.P. (1210±80 y B.P.)

参考文献

- 大池昭二 十和田火山完新世火山灰編年表 1978
 大池昭二 十和田火山東麓の火山灰 東北の土壌と農業 1973
 大池昭二 十和田火山東麓における完新世テフラの編年 第四紀研究第11巻第4号 1972
 大池昭二 十和田火山東麓の完新世火山灰編年表 テフクロロジー総合研究連絡紙No.3 1972
 宮城一男・大池昭二 地質研究十和田・八甲田火山 日本火山学会1970年度秋期大会地質見学案内書
 瀬川司男 縄文期以後の火山灰の遺跡 ドルメン19号 1979
 町田 洋 火山灰は語る 蒼樹書房 1977
 町田 洋 巨大噴火と広域テフラ 季刊自然科学と博物館 1980 VoL47 No.3
 松山 力 聖穴住居跡検出の火山灰に関連して 史跡根城跡発掘調査報告書 昭和55年3月 青森県八戸市教育委員会

C I-1 住居址の上屋構造の推察

扇畑 I 遺跡で検出された住居址のなかに焼失を受けているものは3棟あった。このうちの1棟であるC I-1 住居址は炭化材が多く残っており、それが割合規則的な配置を示して検出され上屋構造の想定が可能と思われた。そこでこの住居址の上屋構造について以下のように推察を行なってみた。

この住居址で検出された炭化材・炭化物の種類とその検出状況は以下のようであった。なおこの住居址は主柱穴が検出されていない。

- ① 南東隅の床面直上から検出された板材：3枚ともほぼ同寸法（114cm×29cm×34cm）で同方向に並べられていた。板材の上位には焼土・炭化物・十和田 a 降下火山灰を含む暗褐色土が堆積していた。
- ② 壁上縁から床面中央部に向かって放射状の配列を示して検出された柱材：壁上縁から住居址中央部に向かって崩れ落ちたような状態で検出され、炭化材の上を焼土や暗褐色土が覆っている。炭化材の下位からは火熱を受けて赤変した十和田 a 降下火山灰が検出された。十和田 a 降下火山灰は壁際で4cm位の厚さで、中央部に近づくほど薄くなり、壁から1m位で認められなくなった。炭化材の横断面形は円形ないしは楕円形を呈し、直径は10cm～15cmであ

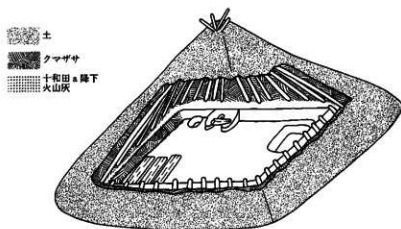
る。長さは、柱材が完全に残っているものがなく不明である。

- ③ 住居址中央部の焼土直下から検出されたクマザサ：床面に密着して検出され、上位の焼土の厚さは10cm近くあった。焼土の下位からはクマザサの他に炭化材は検出されなかった。
- ④ 壁際から検出されたクマザサとブナの樹皮：壁に密着するような感じで検出され、上位には焼土を含む暗褐色土、十和田^a降下火山灰、炭化材等がのっている。壁の一部は火熱を受けて赤変している。

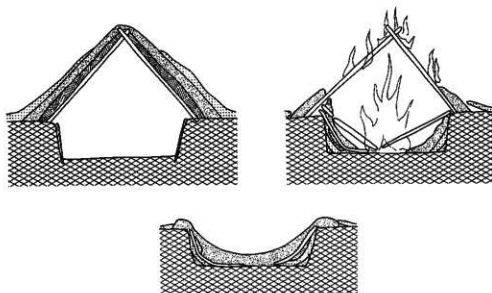
これらのことからこの住居址が焼け、炭化材が形成された状況を推測すると次のようになる。まず燃焼の三条件は、可燃物・燃焼に十分な熱・酸素であり、このうちの一つでも欠けると燃焼は行なわれない。当住居址の炭化材は、燃焼中に土が被さったりして酸欠状態になったために形成されたと考えられる。また焼土の分布は住居址中央部付近とカマド付近に集中し、広く厚く形成されている。焼土は割合堅くしまっており、焼土の下位からは炭代材・炭化物が多く検出されている。これらのことは住居址の屋根の上に土が被せてあり、その土が住居の焼失時に落下した柱材や屋根材の上を覆って炭化材・炭化物を形成し、ある部分では垂木の間から落下し、その上に落下してきた柱材等の焼成により、その火熱を受けて焼土となったことを推定させる。屋根の上に土を被せる例としては樺太・千島のアイネ族の住居址等がある。

出土炭化材の種類は前述のように板材・柱材・クマザサ・ブナの樹皮である。これらの材料とその出土状態からC I - 1 住居址の上屋構造を推測すると次のようになる。主柱や棟木は持たず、垂木を放射状に地面に葺きおろした寄棟造の屋根をかけ、クマザサ等で覆い、その上に土を被せ、ある程度齧きしめて作られたものと思われる。垂木とクマザサの間には棧となるような細い横木（木舞）が必要とされたように思われるが、それらしい材料は検出されていない。垂木の集合する頂部を緊縛しておけば柱への荷重が軽減し、柱を深く掘り立てる必要がなかったと考えられる。また住居内の床面の一部には板を敷き、壁際にはクマザサを立てて構築されていたと思われる。（挿図4参照）

上屋構造については以上のように推測されたが、上屋構造以外にも住居址の焼失に関連して以下のことが推定された。火災現場では火元にあたる箇所がもっともよく焼けていると言われる。当住居址の焼土分布は住居址の中央付近とカマド付近がもっとも広く厚く認められる。住居址の中央部付近は柱材が折れ重なって落ち、燃焼物が多く集まり規模の大きな焼土が形成されたと考えられる。カマド付近は前述の部分ほど可燃物が多くあったかどうか不明であるが普段から火の気の多い所であるので、カマド付近が火元だった可能性が強い。また炭化材の出土状況を見ると東壁の南寄りの部分に炭化材がほとんど検出されていない部分がある。この部分は焼土も少ない。壁の高さも20cm～25cmと他の部分に比べ低い。このことからこの付近が住居の出入口であった可能性も考えられる。



挿図4 C I-1住居址の復元予想図



挿図5 C I-1住居址の焼失と埋没の過程予想図

参考文献

- 工 楽 善 通 文化財講座日本の建築Ⅱ 第一法規 昭和52年
 古 市 豊 司 浅瀬石遺跡発掘調査報告書 青森県教育委員会 昭和50年度
 馬 場 修 平 樺太・千島考古・民俗誌2 北方歴史文化叢書 昭和54年
 小 倉 強 東北の民家 相模書房 昭和51年
 杉 本 尚 次 日本民家の研究 ミネルヴァ書房 昭和51年
 今 和 次 郎 日本の民家 相模書房 1976年
 荒 木 伸 介 先史時代の住居の構造 歴史公論1 昭和55年
 楠 本 政 助 縄文生活の再現 筑摩書房 昭和55年

(2) ビット

本遺跡で検出されたビットを表にまとめると次の通りである。

ビット名	断面形	平面形	開口部径(cm)	底 径(cm)	深 さ(cm)	出土遺物	そ の 他
①AII-51P	フラスコ形	円 形	(115±5)	155×125	70-73	ナ シ	埋土上位に焼土、炭化物混合
②CI-51P	ピーカー形	不整形円形	(120±5)×(90±5)	95×(75±5)	15-23	ナ シ	木根による擾乱あり
③CI-52P	スリパチ形	隅丸長方形	(127±7)×(77±3)	(107±3)×(63±2)	50	土師器片	埋土上位にTO-a、八戸浮石混合
④CI-53P	スリパチ形	隅丸長方形	230×(110±5)	215×(80±10)	北16、南25	土師器片 須恵器片	埋土上位にTO-a、八戸浮石混合、焼土・炭粒混合、擾乱あり
⑤CI-54P	ピーカー形	楕 円 形	(95±e)×85	(85±e)×70	北7、南15	ナ シ	CI-53Pに切られる
⑥CI-55P	スリパチ形	不整形円形	(80±10)	(65±5)	20-25	ナ シ	埋土中にTO-a、焼土・ブロック炭化物を混合
⑦CI-56P	ピーカー形	円 形	115	95	35-40	ナ シ	埋土中に八戸浮石混合
⑧CI-57P	スリパチ形	不整形円形	70×42	50×28	16	ナ シ	CI-58P、CI-102焼土によって切られている
⑨CI-58P	ピーカー形	隅丸長方形	160×75	115×65	40	土師器片	埋土中にTO-a、混合
⑩CI-59P	スリパチ形	楕 円 形	85×65	60×50	20	ナ シ	埋土中に八戸浮石混合、木根による擾乱
⑪CI-59P	スリパチ形	不整形円形	(130±3)×160	(120±3)×115	20-30	土師器片	埋土中にTO-a、混合

③CⅡ-52P	スリハチ形	楕円形	90×73	49×41	20-23	土師器片	埋土中にT0-a、混合
④CⅡ-53P	スリハチ形	不整楕円形	95×85	70×65	北10、南20	土師器片	埋土中にT0-a、炭化物混合
⑤CⅡ-54P	スリハチ形	不整楕円形	(90±5)×(65±3)	65×55	25	ナシ	埋土中に八戸浮石混合
⑥CⅡ-55P	スリハチ形	円形	(100±5)	90×75	25	土師器片	埋土中に八戸浮石混合
⑦DⅠ-51P	スリハチ形	楕円形	85×75	70×60	10-15	土師器片	埋土中に炭化物、灰、埴土混合、炭化材出土

〔註〕・表中の土師器片、須恵器片はいずれも埋土上層からの出土である。

- ・T0-aとは十和田a降下火山灰のことである。
- ・八戸浮石とは八戸浮石流起源のバミスのことである。

①フラスコ形ビット

この形のビットはAⅡ-51Pだけの検出である。このビットは十和田a降下火山灰を埋土に含んでなく、また検出面も近くにあるAⅠ-1住居址の検出面よりも下位にあった。このことからこのビットは十和田a降下火山灰降下以前に構築され廃棄されたものと考えられる。

②隅丸長方形ビット

この形のビット(③、④、⑤)は、検出の状態が住居址とはほぼ同じである。規模、形状共に特徴的であり、埋土の状態は暗褐色土を主体とし、褐色土や十和田a降下火山灰、八戸浮石流起源のバミスなどを粒子状に混在している。この状態は住居址の所で言及したように人為的な埋め戻しが考えられる。従って時期はこの遺跡の住居址に伴うか、それ以後のものと考えられる。

③その他のビット

開口部の形状が円又は楕円のもので、壁は垂直に近いものが3例あるが、大半は傾斜している。開口部の規模は(190±3)×160cmのもの(①)もあるが、一般的には100cm前後である。また検出面から底面までの深さも30~40cmの一例(⑦)を除き20cm前後である。埋土の状態は暗褐色土や黒褐色土を主体とした単層のものが多く、その中に褐色土が粒子状で散在したり、埋土上層に十和田a降下火山灰がブロック状で混在したりしている。この埋土の様子は住居址と似ている。(②、⑤~⑧、⑩~⑬)

(3) 焼土遺構

CⅠ-3住居址付近に3基検出した。この遺構に連続する遺構は確認できなかった。また住居址との関連も不明である。

(4) 陥し穴状遺構

2 蓋検出した。形態・規模共にはは同様で、底面は礎層の上にある。出土遺物は得られず、埋土上面に十和田 a 降下火山灰がレンズ状に堆積していた。埋土は二層にわかれ十和田 a 降下火山灰の混入はなかった。時期はこの火山灰降下以前と推定される。

2. 出土遺物

この遺跡で出土した遺物は縄文式土器片、土師器、須恵器片、砥石、鉄製品、炭化木製構等である。

(1) 縄文式土器

粗掘の際、表土（耕作土）から出土した、時期は縄文時代後期頃と思われる。全て破片であり量も少ない。

(2) 土師器

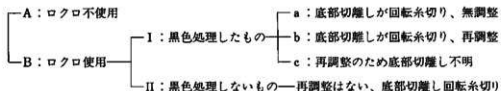
代表的な出土遺物である。遺構にかかわって出土したものが殆どである。器種は坏、高台付坏、甕、埴、鉢、手づくね土器である。

これらの土師器は平安期のもと思われる。平安期の土師器については後期土師器（草間俊一氏：1958）とか第Ⅱ型式（桜井清彦氏：1958）と言われてきたが、近年更にその編年の作業が行なわれ細分化されてきている。この遺跡の土師器は岩手県南部のものとはいくつかの相違点を示し、類似のものは同じ安代町の「保戸沢遺跡」（1976：二戸郡安代町教育委員会）ぐらいである。

ここでは便宜的ではあるが、一応の分類をして出土土師器の説明をしたい。

(坏)

ロクロ使用の有無で2大別し、ロクロ不使用の坏は2個体で類似のものなので細分類は行なわず、ロクロ使用のものを黒色処理、二次的な調整の違いで分けた。



○ A類（ロクロ不使用）

復元できたものが2個体しかなかった。器形は平底で器壁が60°前後の角度で直線的に開くもの。体部に段や沈線はない。外面はヘラケズリ後軽くミガキをかけている。口縁部はヨコナデ調整している。内面はヘラミガキを施し黒色処理してある。

○ B類（ロクロ使用）

- ・ B I a類は形状で2つに分けられる、底面の大きいものと小さいものとである。口径と底径の比は前者が2.7:1ぐらい後者が2:1ぐらいである。外面はロクロ成形のみで内面はヘラミガキ後黒色処理している。ただ外面をヘラミガキしているものもある。また墨書入りのもの、口径が19.2cmと大型のものもある。
- ・ B I b類は完形品1点(㊸)のみである。器形は底径が大きく口径との比が2:1以下である、内外面共にいいヘラミガキが入り、内外面共黒色処理してある。
- ・ B I c類は復元できたもの1点(㊹)だけである。本遺跡で最小の坏である。内面はヘラミガキ黒色処理してある。外面も底面近くと底面をミガキをかけ調整してある。
- ・ B II類はロクロ成形したままで一切調整していない。この遺跡ではこの種の坏が最も多い。形態的に①径高指数が40以上のもの(埴状)、②径高指数が37前後のもの、③径高指数が30以下のものの三つに分けられる。②のものがこの遺跡では一番多い。③のものの中にはカマド内から出土し、2次的な焼成を受けており、内面に油脂状のものが付着しているものがある。これらの坏の多くは明確に把握できるところで体部に2~3重のらせんの条痕がつき、それが等間隔で平行にめぐりロクロの回転に関連している様である。

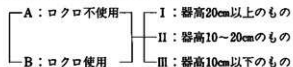
〔高台付坏〕

すべてロクロ成形である。坏の分類のBに該当するので、それによって説明する。

- ・ B I類(黒色処理を施したもの)ではB I b類とB I c類に相当するものがある。台部については大きな違いはない。坏部については浅くて口縁部が開いているものと器壁が内湾して深く、埴状を呈しているものがある。
- ・ B II類(黒色処理していないもの)では完形や復元できたものはない。坏部の形態は〔坏〕B II類の②に類似している。体部には、坏と同様、体部外面に明確なところで3重ぐらいのらせんの条痕がみられる。B II類の高台付坏の出土量は少ない。

〔罎〕

ロクロ使用の有無、器高の違いで次の様に分けた。器高の違いによる分類は、出土した完形品又は復元できたものをグラフにまとめた結果、20cm、10cmぐらいのところに境界が見られることから行なった。(挿図6参照)



○ A類(ロクロ不使用)

ロクロ不使用の埴全般に共通した点は、口縁部が大きく広がらず、ひねり出しでヨコナデ調整しており、軽く外反していること、器面には巻上げまたは輪積みの痕が残っており、外

面をケズリやナデ、内面をナデを主体として調整していること、胎土には細かい礫を多く含んでいることなどである。また頸部には若干の沈線が認められるものもあるが、段は殆んど認められない。

・ A I 類

形態は、底部は小さいが全体として筒型で最大径を体部の肩の付近で表わすものと胴にくらべて口縁部の径が大きいものの二大別ができる。底部には木葉痕や放射状の刻線のあつるものもある。体部外面には粘土状のものが付着しているものが多いが、その効用とか性格については不明である。このような処理をしたものは安代町保戸沢遺跡（前掲）に見られる。

・ A II 類

形態は器高と口径がほぼ同値のものである。大半は色調が黄橙色系統であるが、この類の中には赤褐色を帯び焼成の堅いものがある。また内面を黒色処理したものがある。体部外面に粘土状のものを付着させたものはなくなる。

・ A III 類

形態は器高より口径の大きいものになる。類例が少ない（復元1点のみ）。

○ B 類（ロクロ使用）

この種の壺の出土は少ない。巻き上げまたは輪積み成形後ロクロ成形したものや、ロクロ成形の上更にナデ等の調整をしたものなどがある。

・ B I 類

この類には完形や復元できたものはない。破片の大きさから見て、この分類に入るものを見ると、口縁部は内湾するものが多い。内面をナデたもの、外面をナデたもの、巻き上げまたは輪積み成形後ロクロ成形したものなどがある。

・ B II 類

口縁部は外傾する。口唇部に稜のあるものもある。底部は手持ちヘラケズリのものがある。体部下半にケズリ痕のあるもの、体部をロクロ成形後ケズリやナデを施したものもある。

・ B III 類

器形は B II 類を小形にしたもので、底部切離しは回転糸切りである。

【埴】

この土器（図版35参照・C I—1 住居址出土）を埴と呼ぶこととする。底部切離しは回転糸切りで、体部上半から口縁部にかけて大きく内湾し、底部から体部下半については埴と類似している。全体として丸味を帯びた形となる。C I—1 住居址からのみ出土した。

〔鉢〕

外面には指で押えて調整したような痕があり、内面はナデで調整している。楕鉢状の形態をしている。厚手である。

〔手づくね土器〕

指でこねて作ったと思われる小型の土師器である。

以上述べた土師器について概括すると、「坏」は殆んどロクロ成形で底部切離しは回転糸切りである。形状は器高が大きく現在日常使用のごはん茶わんのようである。従って坏というより「坏型土器」と言った方がよいかも知れない。体部外面には2～3条のらせんの条痕がめぐっている。色調は黄橙色系統である。「高台付坏」はすべてロクロ成形で内面黒色処理のものが多く、台部は底部切離し後はりつけて成形している。坏部はお坑型のものもある。「甕」は大型のものは殆んどロクロを使用していない。小型ほどロクロ成型の比率が大きくなる。胎土には細礫を多く含みナデやケズリなども大ざっぱで巻上げまたは輪積みのあとが残っている。大型のものは外面に粘土状のものを附着させている。中型の甕の中には赤褐色を帯び焼成の堅いものがある。

(3) 須恵器

粗掘時に出土したものと住居址から出土したものがある。いずれも破片のみである。小型でタタキ目のないものと大型でタタキ目のあるものとある。

(4) その他の遺物

砥石、鉄製品、木製品等については「IV検出遺構と出土遺物」の記述のみとする。

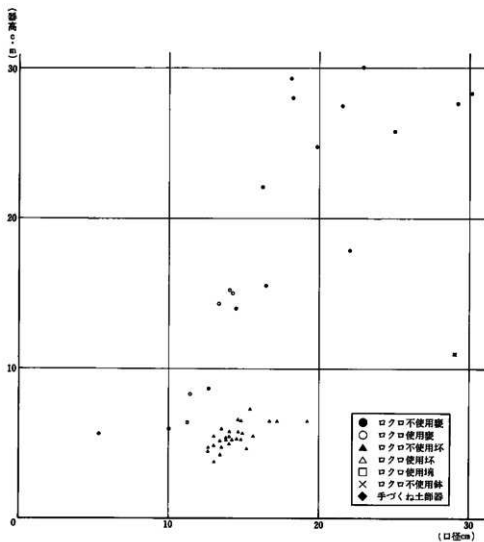
3. おわりに

この遺跡は北流する安比川の東側にある小規模な扇状地の扇尖部分にあり、北西方向になだらかに下がる斜面を見おろす位置にあり、南東側は山がせまっている。調査区域が東北縦貫自動車道建設地のためか発見された住居址は標高390 m付近の同位面に並んで占地しているかの如くである。しかし北西側(扇状地の広がる方向)の畑地や水田にも住居址の存在がないとも言えない。この集落の全貌は今後の調査に待たねばならない。また昭和55年調査の扇畑II遺跡(安比川支流見岳川をはさんで対峙している)にも同時期の集落の連なりが見られる。

この集落は十和田 a 降下火山灰降下時の頃のものと思われ、十和田 a 降下火山灰の降下年代の確定によって絶対年代が推定されるものと考えられる。この時期の岩手県中央部や南部地域とは出土遺物などから見て同一視することはできない。今のところ岩手県下ではこの遺跡と同じ特

徴を持つものは安代町で調査されたものだけの様である。今後秋田県鹿角地方との関連を考えていく必要があるであろう。

出土遺物のうち、大型甕の体部にある粘土附着物、坏型土器のらせん条痕、中型甕等に見られる所謂赤ヤキと見られるものなど、遺物においても今後に残された課題は多い。

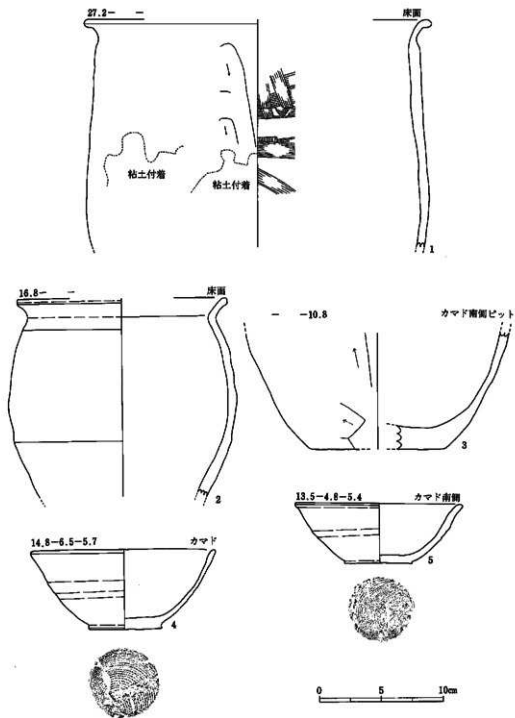


挿図 6 出土土器法量グラフ

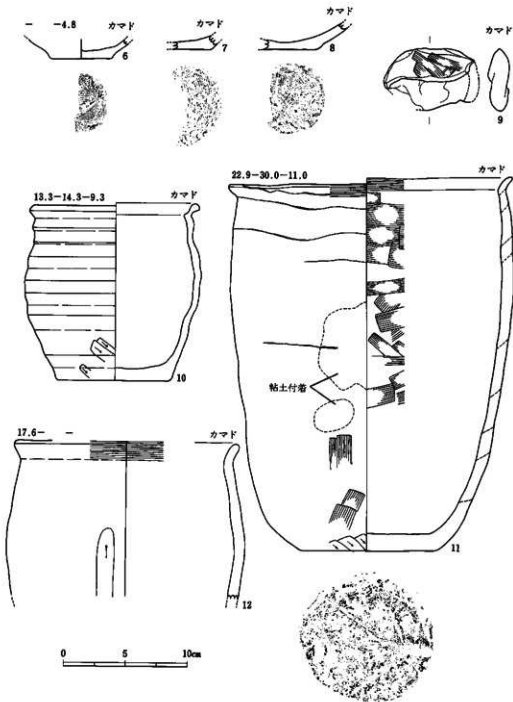
参 考 文 献

- 桜井 清彦 (1958) 東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題 『館址』
- 氏家 和典 (1957) 東北土師器の型式分類とその編年 『歴史第14号』
- 氏家 和典 (1967) 陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって—奈良・平安期土師器の諸問題
『柏倉亮吉教授還歴記念論文集』
- 小笠原好彦 (1976) 東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題 『東北考古学の諸問題』
- 桑原 滋郎 (1976) ロクロ土師器坏について 『歴史第38号』
- 工藤稚樹・桑原滋郎 (1972) 東北地方における古代土器生産の展開 『考古学雑誌57巻3号』
- 草間 俊一 (1958) 先史期 『盛岡市史』
- 桑原 滋郎 (1976) 須恵系土器について 『東北考古学の諸問題』
- 青森県教育委員会 (昭和51年) 黒石市牡丹平南遺跡、浅瀬石遺跡発掘調査報告書
- 青森県教育委員会 (昭和50年) 中ノ沢西張遺跡
- 青森県教育委員会 (昭和53年) 松本遺跡
- 宮城県教育委員会 (昭和49年) 岩切鴻ノ巣遺跡
- 森 浩一編 (1974) 日本古代文化の探究 鉄 『社会思想社』
- 甘粕 健編 (1978) 考古資料の見方《遺物編》 『柏書房』
- 窪田 歳郎 (昭和54年) 鉄の考古学 『雄山閣出版株式会社』
- 御岩手県埋蔵文化財センター (昭和54年) 主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書
- 安代町教育委員会 (1976) 保戸沢遺跡発掘調査報告書
- 世界大百科事典 『平凡社』
- 世界考古学辞典 『平凡社』
- 日本原始美術大系5 『講談社』
- 日本の考古学V 『河出書房新社』

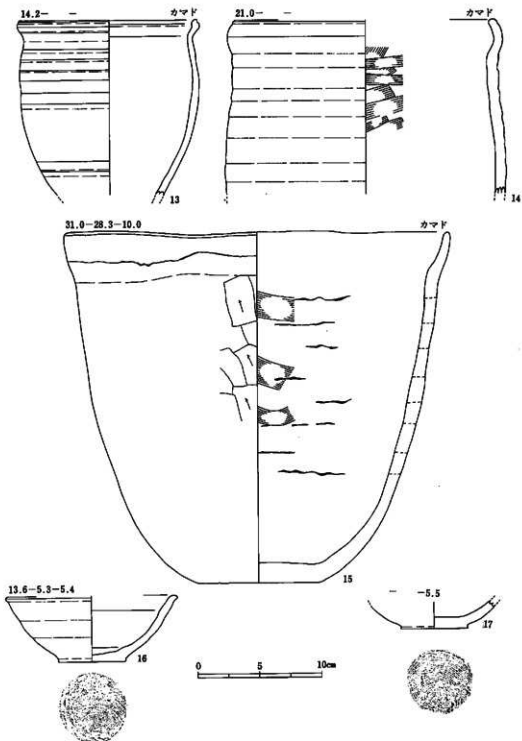
遺物図版



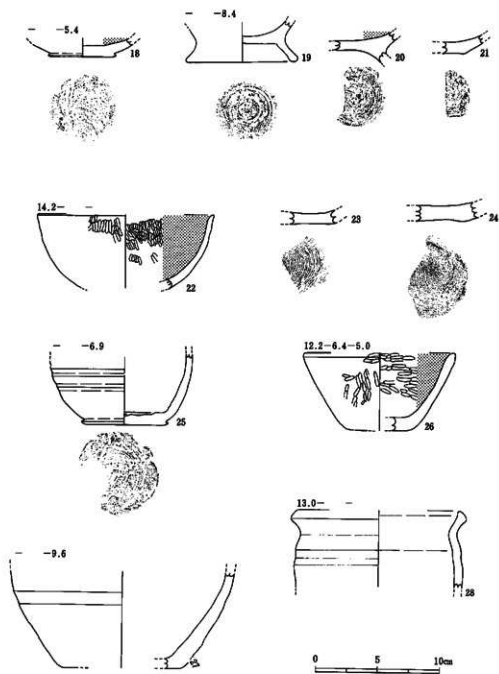
図版27 AI-1住居址出土遺物



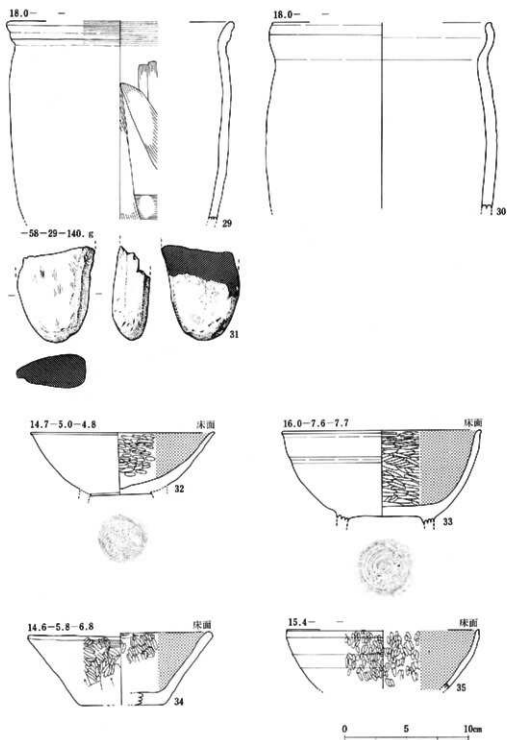
図版28 A I - 1 住居址出土遺物



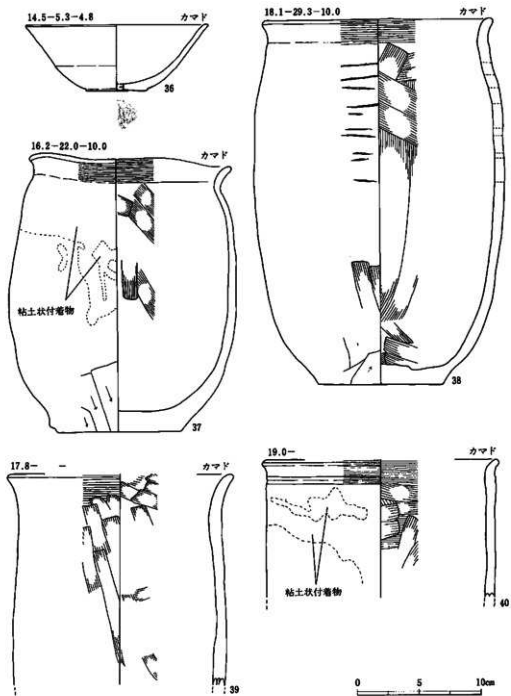
図版29 A I - 1 住居址出土遺物



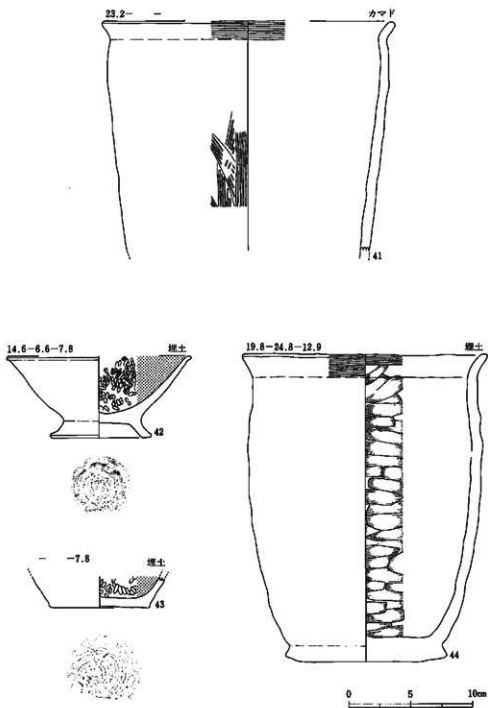
图版30 A I - 1 住居址出土遗物



图版31 A I - 1 住居址出土遗物 (29~31)
B II - 1 住居址出土遗物 (32~35)

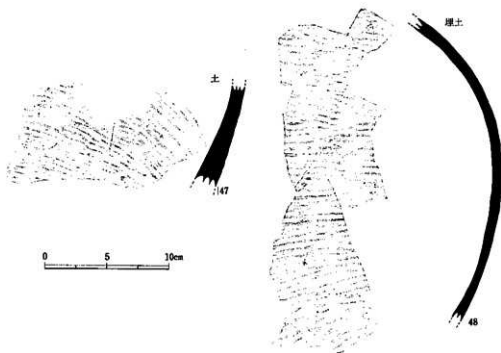
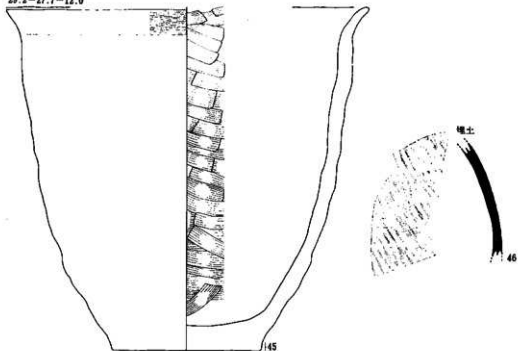


図版32 B II - 1 住居址出土遺物

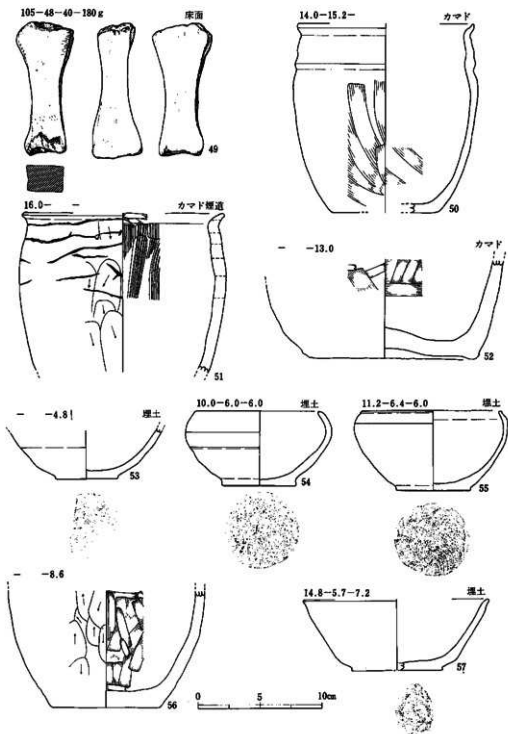


図版33 B II - 1 住居址出土遺物

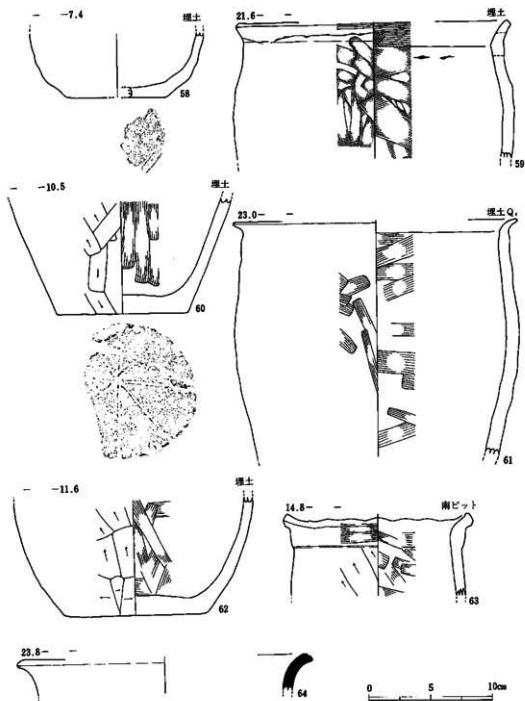
29.2-27.7-12.0



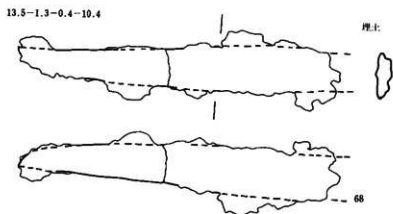
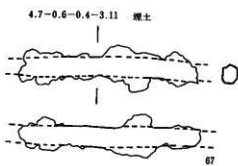
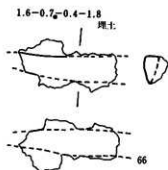
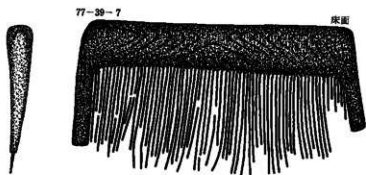
图版34 B II-1 住居址出土遺物



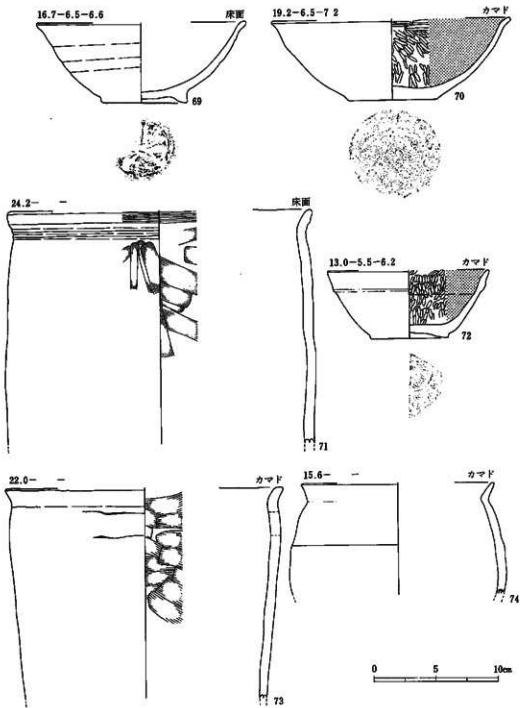
図版35 CI-1住居址出土遺物



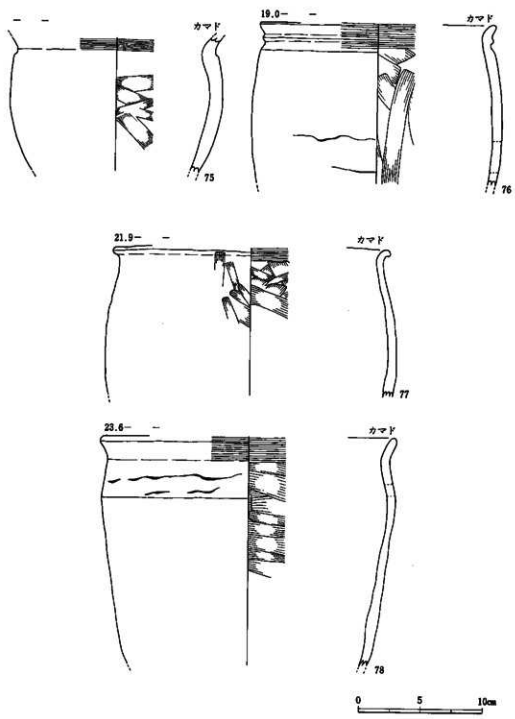
図版36 CI-1住居址出土遺物



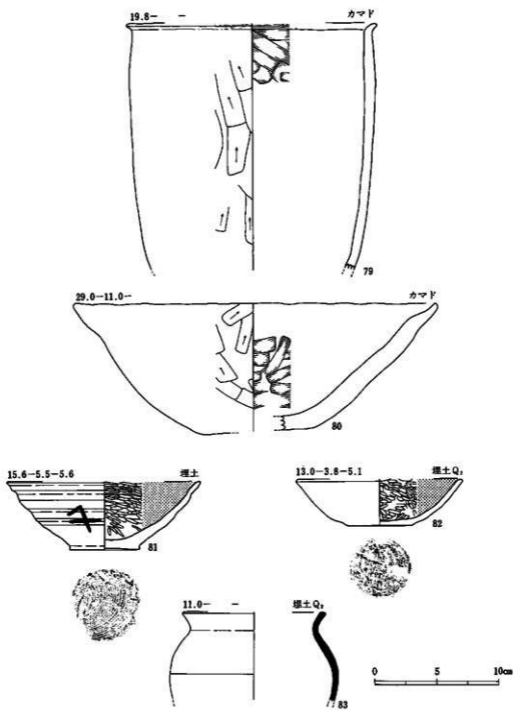
图版37 C I - 1 住居址出土遗物



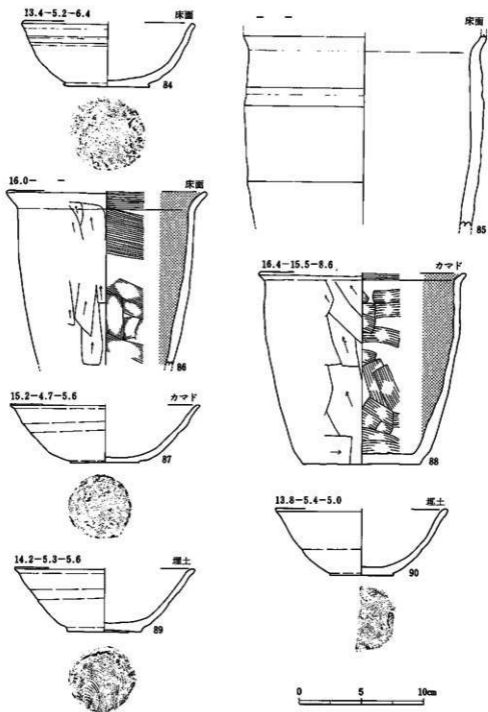
図版38 C1-2住居址出土遺物



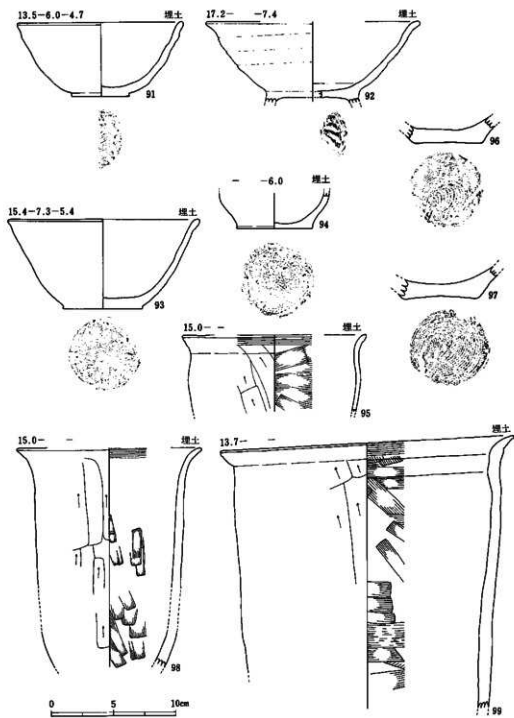
図版39 C I - 2 住居址出土遺物



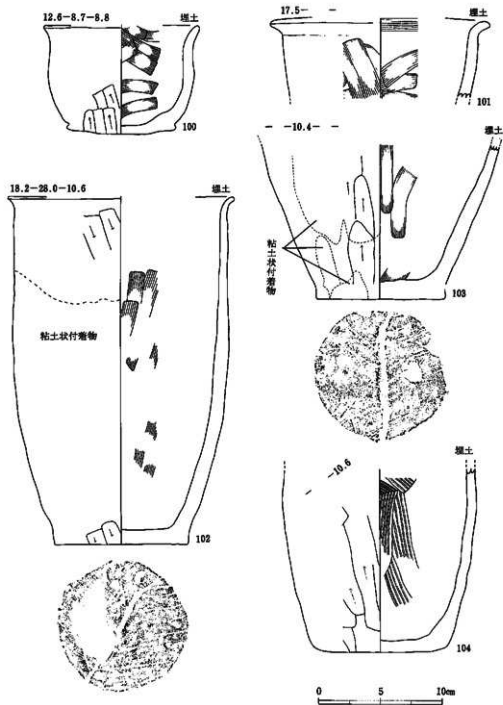
図版40 C I-2 住居址出土遺物



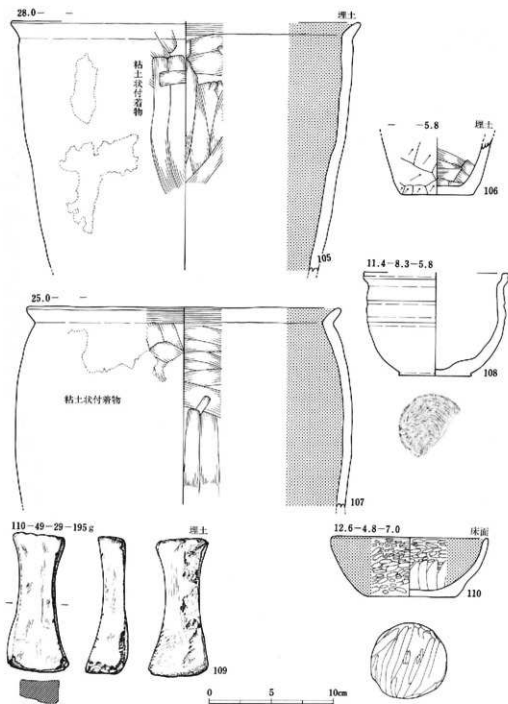
図版41 C I - 3 住居址出土遺物



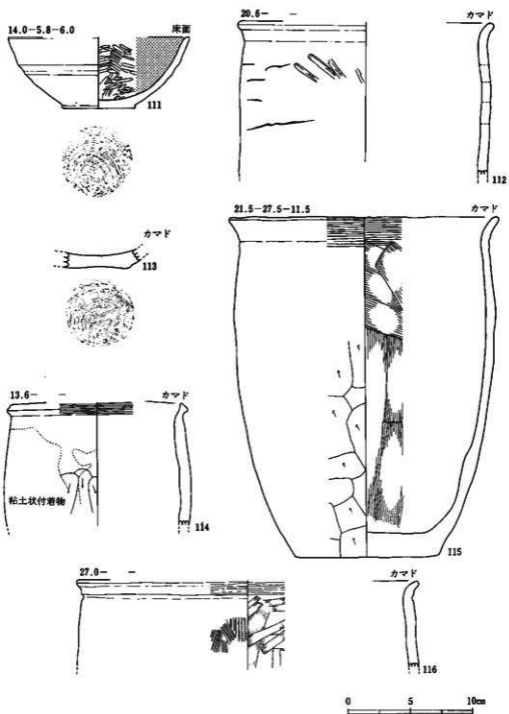
図版42 C I - 3 住居址出土遺物



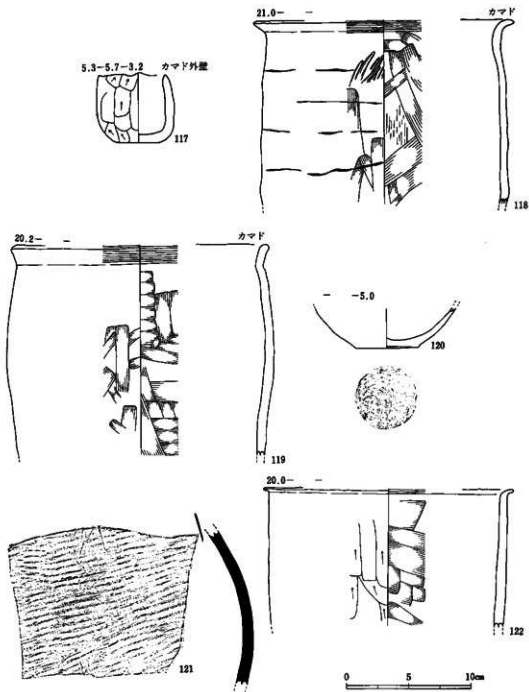
图版43 CI-3住层址出土遗物



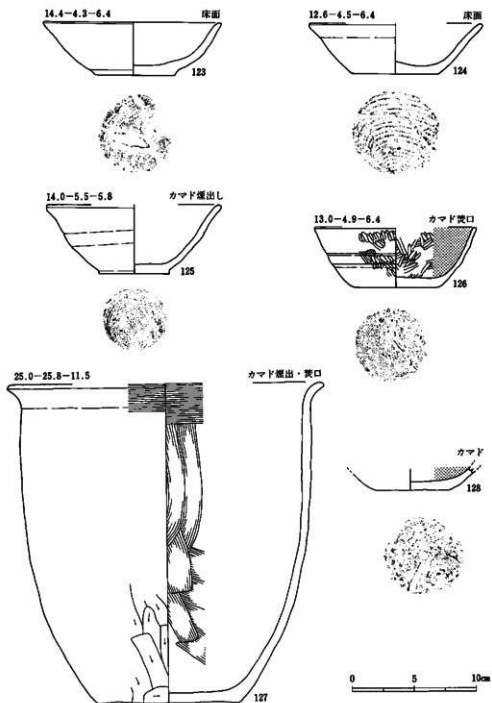
图版44 C I - 3 住居址出土遺物 (105-109)
C II - 1 住居址出土遺物 (110)



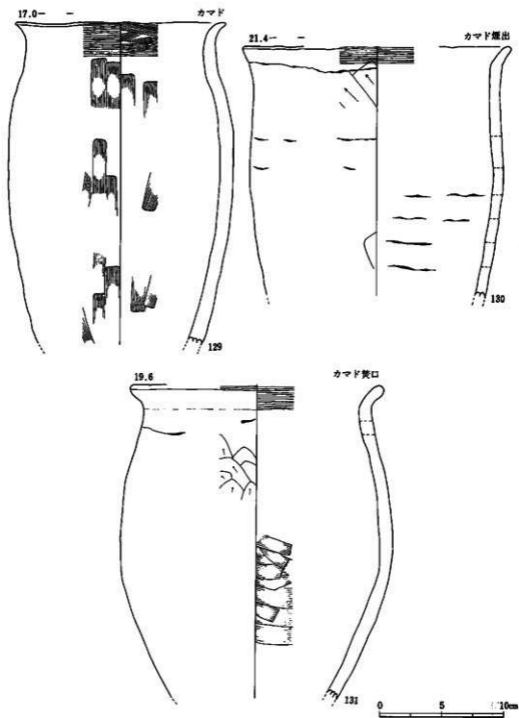
図版45 D I - 1 住居址出土遺物



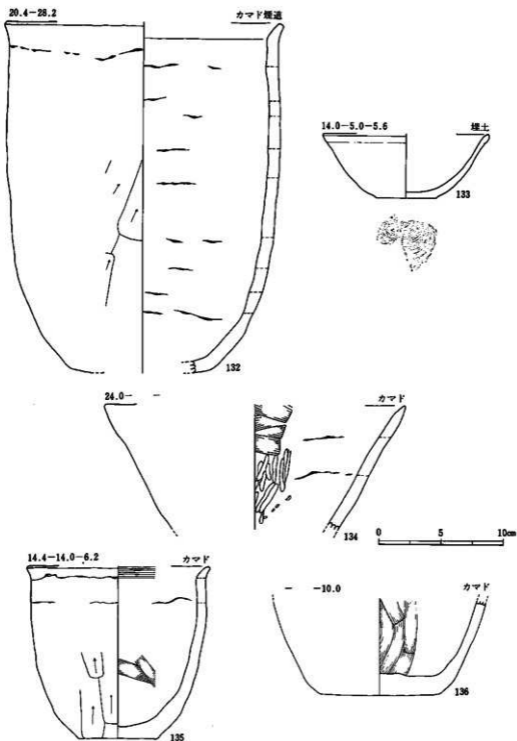
図版46 DI-1住居址出土遺物



図版47 D III-1 住居址出土遺物

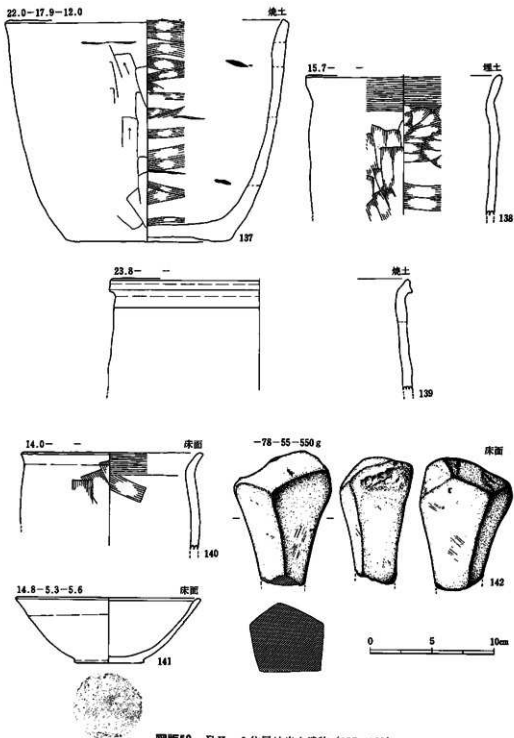


図版48 DⅢ-1住居址出土遺物



図版49 DⅢ-1住居址出土遺物(132-134)

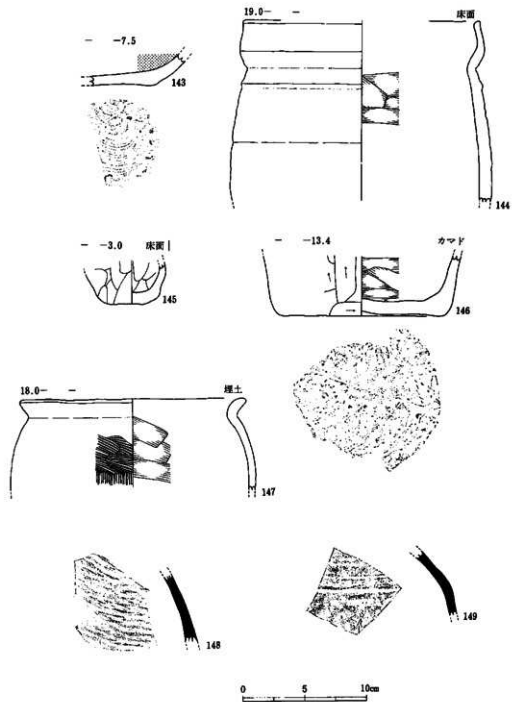
EⅡ-1住居址出土遺物(135, 136)



图版50 E II-1 住居址出土遺物 (137-139)

E II-2 住居址出土遺物 (140)

E II-3 住居址出土遺物 (141·142)

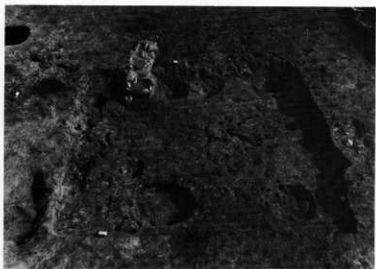


図版51 E II-3 住居址出土遺物 (143~148)
C I-53ピット出土遺物 (149)

写真図版



写真図版1 遺跡全景写真



全 景



カマド

写真図版 2 AI-1 住居址



煙道断面



カマド

写真図版3 AI-1住居址



全 景



埋土断面 (E-W)



遺構検出状況 手前：AⅠ-Ⅰ住 奥：BⅡ-Ⅰ住

写真図版 4 BⅡ-Ⅰ住居址



カマドの石組



カマドの石組

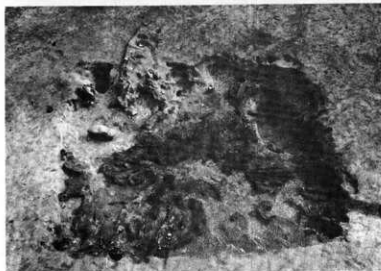
写真図版 5 BII-1 住居址



全 景



埋土断面
(E-W)



炭化材出土状況



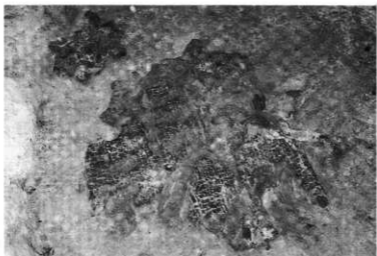
カマド全景



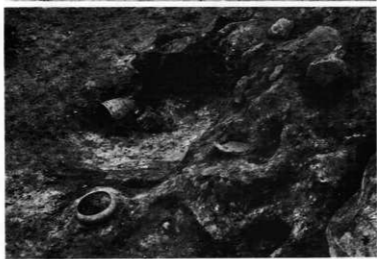
カマド断面



ピットの
土層断面



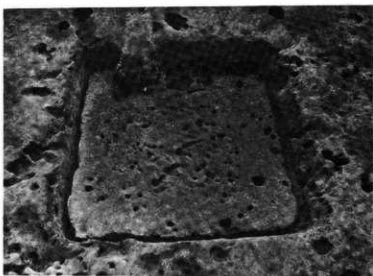
炭火材（板材）
出土状況



遺物出土状況



遺物出土状況



全 景



カマド全景



煙道断面

写真図版9 C1-2住居址



全 景



埋土断面 (N-S)



埋土断面 (E-W)

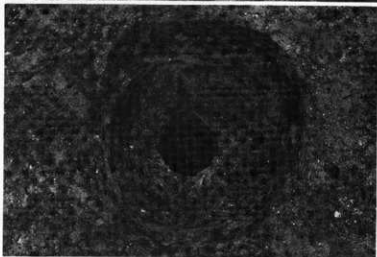
写真図版10 C1-3住居址



南東隅付近の
遺物出土状況



カマドの断面



西側のピット



全 景

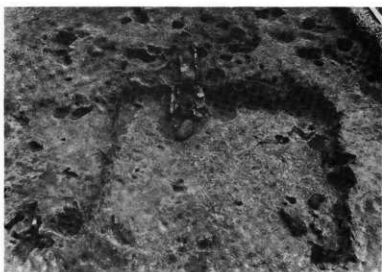


遺物出土状況



風倒木址と
土層断面

写真図版12 CII-1住居址、風倒木址



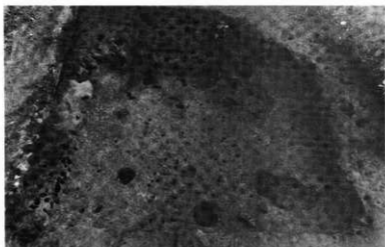
全 景



埋土断面
(E-W)



炭化材出土状況



全 景



埋土セクション
(E-W)



埋土セクション
(S-N)



カマドの石組



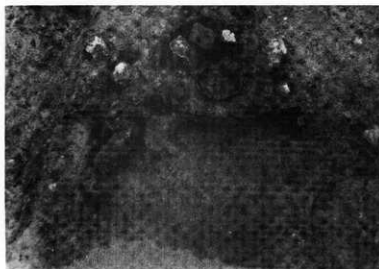
E II-1 住
遺物出土状況



E II-1 住内 ビット全景

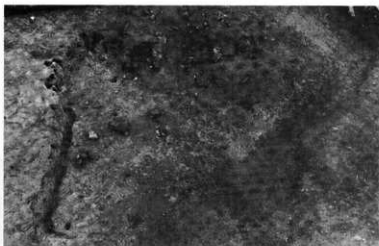


E II-2 住 全景



E II-2 住
カマド

写真図版15 E II-1 住居址、E II-2 住居址



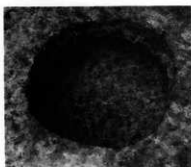
全 景



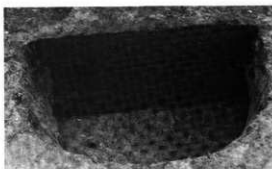
炭化材
出土状況



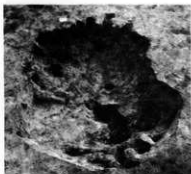
カマドの石組



A II-51ピット 全景



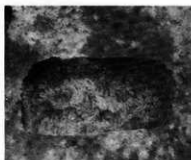
A II-51ピット 埋土断面



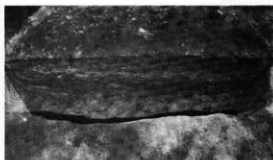
C I-51ピット 全景



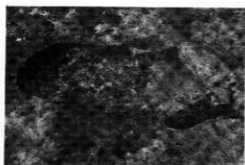
C I-51ピット 埋土断面



C I-52ピット 全景



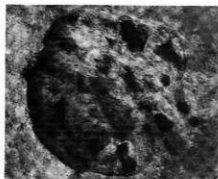
C I-52ピット 埋土断面



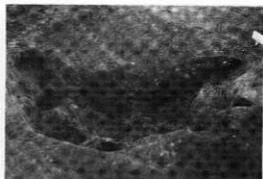
CI-53ビット 全景



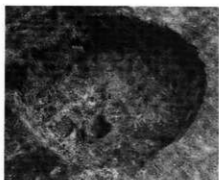
CI-53ビット 埋土断面



CI-55ビット 全景



CI-55ビット 埋土断面

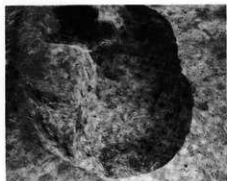


CI-56ビット 全景



CI-56ビット 埋土断面

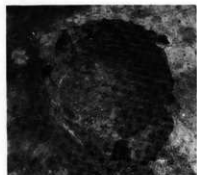
写真図版18 CI-53、CI-55、CI-56ビット



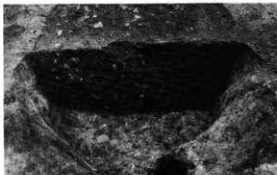
C I-58ビット 全景



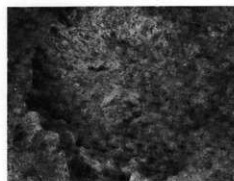
C I-58ビット 埋土断面



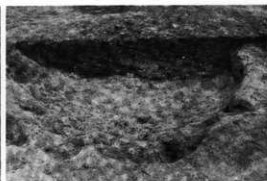
C I-59ビット 全景



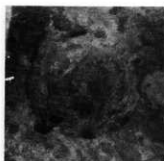
C I-59ビット 埋土断面



C II-51ビット 全景



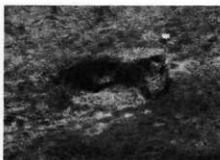
C II-51ビット 埋土断面



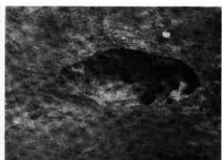
C II-52ピット 全景



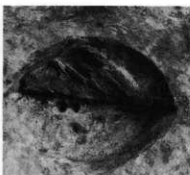
C II-52ピット 埋土断面



C II-54ピット 全景



C II-55ピット全景

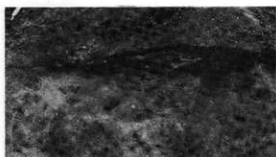


D I-51ピット 全景



C I-101焼土遺構 断面

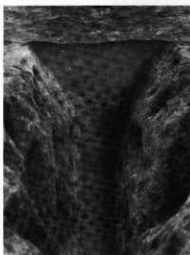
写真図版20 C II-52、C II-54、C II-55、D I-51ピット、C I-101焼土遺構



C I-102焼土遺構 断面



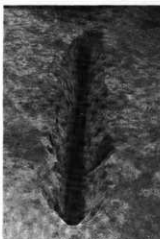
C I-103焼土遺構 断面



D II-151陥し穴状遺構 断面

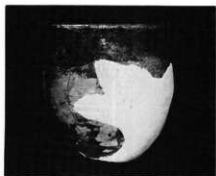


C II-151陥し穴状遺構 全景



D II-151陥し穴状遺構 全景

写真図版21 C I-102、C I-103焼土遺構、C II-151、D II-151陥し穴状遺構



2



4



5



9



10



13

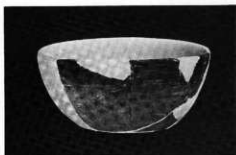


11

A1-1 住居址
写真図版22



15



22

A I - I 住居址



32



33



34



36

B II - I 住居址
写真図版23



37



38



41



42



44



45

B II - 1 住居址
写真図版24



50



51



54



55



57



61

C I - I 住居址
写真図版25



69



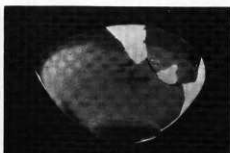
73



80



81



82



83

CI-2 住居址
写真図版26



84



87



88



91



92

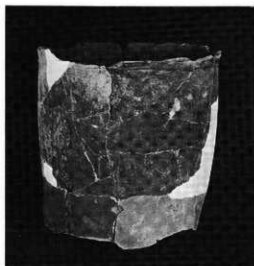


93



98

C I-3 住居址
写真図版27



99



102



100



104



105



107

CI-3 住居址
写真図版28



108

C I - 3 住居址



110

C II - 1 住居址



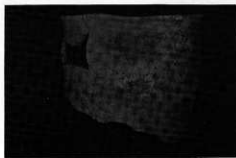
111



115

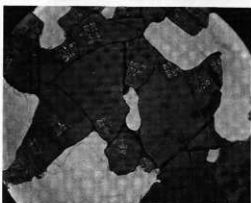


117



119

D I - 1 住居址
写真图版29



123

124



125



126



129

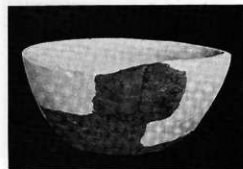
D III - I 住居址
写真図版30



130



131



136

E II-1 住居址



D III-1 住居址

132



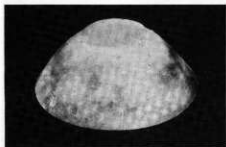
135



140

E II-2 住居址

写真図版31



141



C I - I 住居址

49



C I - 3 住居址

109



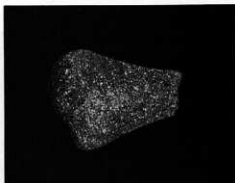
E II - 3 住居址

145



A I - I 住居址

31



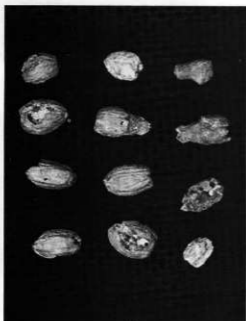
E II - 3 住居址

142



C I - I 住居址

65

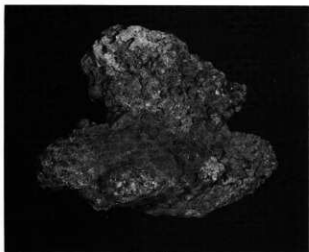


D I - I 住居址

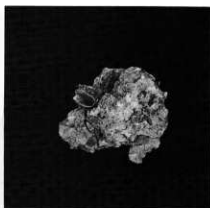


D III - I 住居址

写真图版33



AII-1 住居址



CI-1 住居址

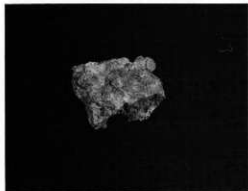


CI-1 住居址

左上66、右上67、下68



CI-1 住居址



CI-2 住居址



DI-1 住居址



CI-3 住居址

粘土状付着物



AI-1 住居址

油脂状付着物



ブナ樹皮

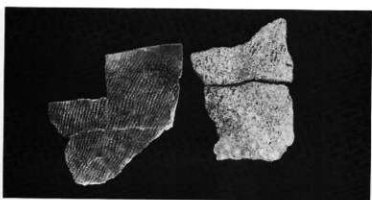


ブナ樹皮

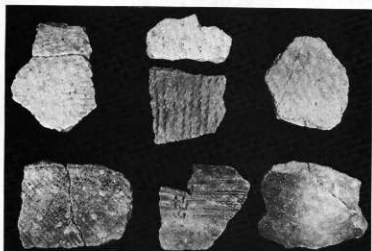


クマザサ

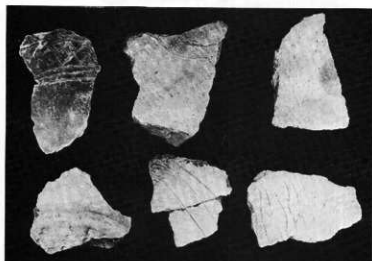
CI-1 住居址
写真図版35



B II区



E II区



E II区

縄文土器片
写真図版36

岩手県埋文センター文化財調査報告書第17集

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書
二戸郡安代町扇畑 I 遺跡

昭和56年2月25日 印刷

昭和56年2月28日 発行

発行 (財) 岩手県埋蔵文化財センター

〒020 岩手県盛岡市向中野字向中野39-1

TEL (0196) 35-6622

印刷 川口印刷工業株式会社

© 岩手県埋文センター1981